

41532

教科書文庫

4
810
41-1916
20000 65462

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

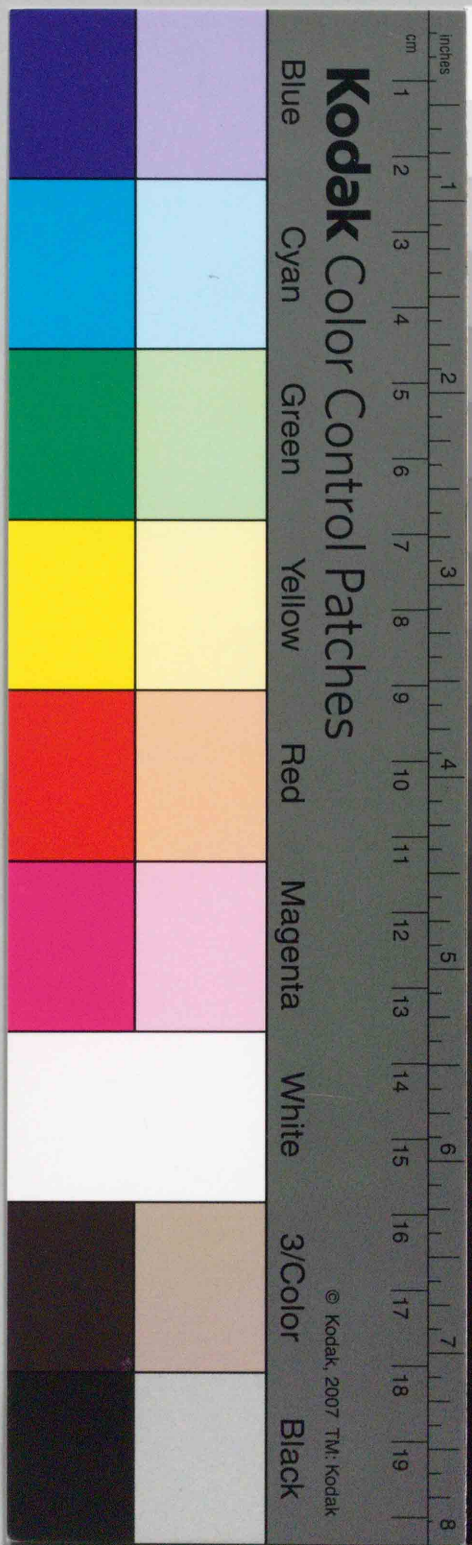


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
大5

大正國語讀本

卷一



資料室

日六十二月二十年五正大

濟定檢省部文

用科教科語國校學中

42
810
大5

保科孝一編

大正國語讀本

東京 會社資育英書院發兌



大正國語讀本 卷一

目次

- 一 千里の春その一……………大和田建樹……………一
- 二 千里の春その二…………………………五
- 三 春の曲(韻文)……………島崎藤村……………九
- 四 花御堂……………(花園生活)……………一一
- 五 耳の趣味……………鈴木鼓村……………一七
- 六 甲板上より友に(候文)……………(作文及文法要説)……………二三
- 七 ラインの旅…………………………二五
- 八 アレクサンドル大王……………(少年鑑)……………三三

目次

九 競馬……………四二

一〇 巴里の五月……………島崎藤村・五〇

一一 燈臺守……………藤井乙男・五五

一二 一燈錢(候文)……………久阪義助・六〇

一三 長藩の志士……………中川克一・六三

一四 恩を忘れず……………湯淺常山・六八

一五 山田長政……………(歴史物語血吹雪)・七一

一六 臺灣の夏……………大島久滿次・七九

一七 夏の夜(韻文)……………土井晚翠・八六

一八 螢……………(螢の話)・八八

一九 富士山その一……………金子元臣・九六

二〇 富士山その二……………一〇四

二一 笑話五則……………和田垣謙三・一〇八

二二 湘南雜筆……………徳富蘆花・一二五

二三 ビスマルクの幼時その一……………落合直文・一二九

二四 ビスマルクの幼時その二……………一二三

二五 伯林落その一……………河上肇・一二八

二六 伯林落その二……………一三五

二七 智慧伊豆守……………大町桂月・一四三

二八 心の修行……………村井寛・一五〇

二九 ベンギン……………杉村廣太郎・一五五

三〇 月夜の高坊主……………北條園水・一六五

三一 野寺の鐘(韻文)……………佐々木信綱二六九

三二 東郷大將……………二七一

大正國語讀本卷一

一 千里の春その一

大和田建樹

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の緑を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。この間に一線を引き行くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出すは、歌か、詩か、それも畫か。

ハナカレ

ヒルガエ

七砲臺
品川沖の舊臺
場をさす。

七砲臺邊、波おだやかにして、羣れ飛ぶ鷗、落花の風に
 飄るに似たり。半ば帆を張りて出て行く舟あり、櫓
 をあやつりて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に
 消えて、見れども見えず。
 松青きところ、色どりそふるに桃の紅を以てす。自
 然はその美をおくりて旅客を慰め、詩人はその美を
 詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人毎に
 唯うつくしと呼ぶ。
 三保の松原けむりわたりて、春は畫の如し。磯に碎
 けて折れ返る波、波路の末にうきたつ雲、何物か造化



田子浦より富士山を望む

の妙筆に漏れん。近き舟
 は行けども、遠き帆は動か
 んともせず。杳として見
 とめらるゝは伊豆なるべ
 し。富士は水彩畫の如く
 にして、窓の右に立ち、又左
 にあらはる。
 平原十里、麥は綠に、菜種は
 黄なり。熱田の社を左に
 見て、春風に吹かれゆけば

千里の...

名古屋の城は紛はぬ影を見せそめたり。田夫は金の鯨を指して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して、わが好む方へと人を勧む。

朝日將軍
木曾義仲

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡何れのところぞ、問へども答へず。霞にたゞまる、遠近の山影、或

鴛の浦風
琵琶湖を鴛の湖といふ。

は淡く、或は濃く、鴛の浦風波に眠りて、粟津の松原ひとり昔を語り顔なり。

東寺
下京區にありて、眞言宗の名刹なり。

東寺の塔は吾を待ちて立ち、鴨川の水は吾を迎へて歌ふ。最愛の母にあひ、なつかしき妹と語るに似た

るは、いつも京都に著きし時の心地なり。

二 千里の春 その二

山紫に水明かなる處、躑躅を柴に折りそへて戴き連れたる大原女も、いと風情あり。如意嶽より吹き來る春風は、軽く我が袖を拂ひて、行くへは遙かに堤の柳の絲にあり。

大原女

大原村の女。大原は京都北方の村。

如意嶽

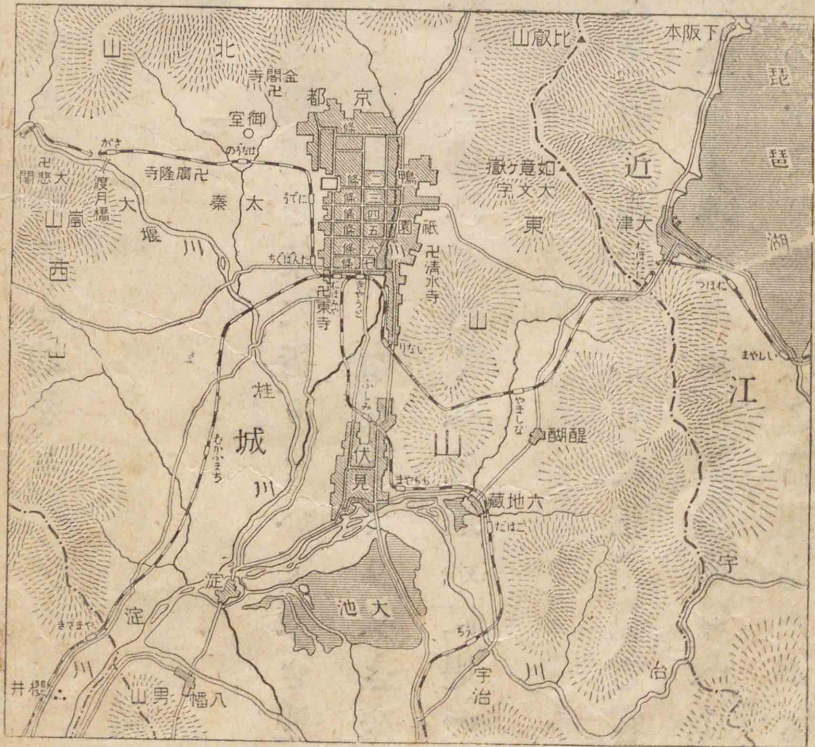
一名大文字山。京都の東方にある名山。

清水觀音
京都東山の麓なる清水坂の上にある。法相・眞言の二

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客、けふも清水觀音の堂前をみたしぬ。舞臺のうへより見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも

宗を兼ね、
四條畫
徳川時代に松
村吳春が開き
たる一派の
畫。

一幅の四條畫な
るに、姥は此の間
に立ちて蕨餅め
せ。など呼ぶ。暫
し休みて、ながめ
わたせば、淺黄に、
藍にかすみわた
れる八幡山崎の
あたりもおもし
ろきに、東寺の塔



八幡
山城綴喜郡男
山の東麓なる
町。
山崎
同乙訓郡の南
方にある村。

御室
仁和寺の別
稱、此の寺は
宇多天皇の開
基にして眞言
宗。

大悲閣
嵐山の半腹に
ある觀音堂。

を松の間に墨がきにせる筆の力こそたくみなれ。
西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く、樓
門赤く、茶煙たえぐにあがりて、花きはめて白し。
塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて
香雲の中につままる。誦經の聲遠くひびきて、鶯の
歌高き梢にあり。
かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點
綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。
小舟にのりて漕ぎゆく人あり、岸の此方にてながむ
る人あり。かなたの坂をのぼりて大悲閣に至れば

眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出せるが如く、また友禪を染めなせるが如し。

太秦
山城國葛野郡
にある村。
廣隆寺
聖徳太子の開
基にして眞言
宗の名刹なり。

途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。

暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ、大文字も姿をかしくしぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るく、いろどられゆく山影、うすく、青く、黒く消されゆく人影、いづれ詩中の者ならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、か

へりみれば西山もなく、北山もあらず。(雪月花)

三 春の曲

島崎藤村

うてや鼓の春の曲

雪にうもるゝ冬の日の

悲しき夢はとぎされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこそめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とを縫ふ絲は

けさ萌え出でし青やなぎ

霞のまくを引きあけて

春をうかがふことなかれ

花咲きにほふかげをこそ

春のうてなと云ふべけれ

小蝶よ花にたはぶれて

優しき夢をみては舞ひ

酔うて羽袖もひらくと

春の姿をまひねかし (藤村詩集)

四 花御堂

美しい繪卷物を繰展べる様を懐かしい幼時の記憶を辿る毎に、私は何時も一點不可思議な然もゆかしい思ひ出を偲ぶ事がある。それは四月八日に各寺院が催す釋迦の降誕會である。天を指し地を指し、姿を正して直立してゐる赤ん坊のお釋迦様は、幼い子供の眼には唯異様に輝くに過ぎぬけれど、その色

彩鮮かな種々の花で飾られた御堂の麗しさは、無垢な心を清浄の世界に誘ひ出したものである。

私は嘗て此の降誕會の折に、他の稚き友等が、或は徳利を下げ、或は瓢箪を携へて、各寺院に甘茶を貰ひに廻る時、赤ん坊の釋迦が安置してある花の御堂に就いて靜かに考へた事がある。子供ながらに彼の様な家が欲しい、花の家に住みたいと思つた。幼い胸には常にこの空想が離れなかつた。敢て榮華の夢に耽らうと云ふのでもなければ、虚飾の塵に浴して世に誇らうが爲でもない。たゞ清き淨き少年の心

は、彼の長閑かなる春の野に舞ふ胡蝶の様に、美の影を追ふに過ぎないのである。

私の家は寺院に近い處にあるので、雛僧も友人の一人に數へられ、お互に往來して楽しく遊ぶ日が多かつた。毎年四月八日が來ると、花の御堂を作る爲に、後の山に登つて躑躅の花を剪取り、寺の庭隅からは八重山吹の花を手折つて來るのが雛僧の役目で、私もよく其の手傳をした。是等の花を小さな御堂の屋根に挿したり、松の若芽で其の軒を葺いたりした。時を去る三千年前、地を隔つる三千里外、北に峨々た

Himalaya

迦比羅城
今のネバル國
タライ地方に
あたる。

るヒマラヤの雪嶺を仰ぎ、南に洋々たる恒河を抱いた、世にも稀なる豊饒の領域が印度の國內にあつて、此處には純潔な血統を傳へて來た釋迦種族といふ人種が住んでゐた。その種族の大君主が迦比羅城の淨飯王で、此の王は智勇兼備の良將であるとともに、徳望一世に輝ける名君であつた。王妃麻耶夫人も亦容姿端麗淑徳の譽高く、諸人の範となるべき賢婦人であつた。斯くの如く、王と王妃と天徳地恩相並び、領内常に和氣霽然、萬民頌歌の聲絶えざる中に、太子として誕生したのが天上天下唯我獨尊の赤ん

坊、即ち一代の救世主大聖釋迦であつた。

吾が幼時の懐かしき記憶に、美の影を宿してゐる花の御堂は、抑如何なる縁起に因つて今日に傳はつてゐるのであらう、淺學な私には判らない。只釋迦の降誕に關する事を記した先哲の文學に依れば、偉大なる佛陀の誕生は世の常と變り、然も其の産室が屋外、否寧ろ華麗なる花園に假設されたものゝ様に察せられる。又傳説によれば、此の時天地に光明輝き、美妙の音樂響き渡り、人々不思議の思に打たる、折柄、玲瓏玉の如き王子が生れ出でた。

藍毘尼園
迦比羅城と拘利城との中間にありし花園にして、兩城の人民の休養所。拘利城は麻耶夫人の父の居城。

斯くして生れ出た赤ん坊の釋迦は、北方に七歩進んで、片手は天空を指し、片手は地上を指し、天上天下唯我獨尊」と云つた。澄渡つた碧空の彼方からは麗しき蓮華が繽紛として降り亂れ、人々はこれに觸れて何とも云へぬ樂しさの全身に浸むを覺え、藍毘尼園の百樹千草、一時に美花を開いて芳香高く四邊に薫じた。迦毘羅國中邪曲なる者は一時に慈悲心を生じ、疾に苦しむ者は療せずして自然に癒え、猛獸凶禽は寂然として聲を潜め、八方世界の妙音は等しく此の救世主の降誕を讚美祝福したさうである。此の

奇蹟を傳へた藍毘尼園が如何なる者であつたかは、後世その靈蹟を巡錫した人々の記録に依つて見ると、迦比羅城の東方十五英里の處にあつて、國中には清く澄んだ池杯があり、種々様々の花が樹々草々に咲亂れてゐたとあるから、定めし美しい花園であつたに違ひない。蓋し花御堂の縁起は、かゝる事柄に基づいた者であらうと思はれる。(花園生活による)

五 耳の趣味

鈴木鼓村

一 野の曲

翠濃い丘陵の際に巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であつた。

川尻のせゝらく汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草の屋が建並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く静かだ。

梨杏などの木立を隔てゝ、直径丈にも餘る水車が軋つてゐる。山吹木蓮の蔭から梭の響も傳へられる。鶏が一聲長閑かに啼き渡ると、椿の花がぼとりと落ちる。桃の蔭に牛が鳴く。その間正しき拍子と按

排よき旋律とを有つて、ひつそりした裡に趣ある曲が繰返される。春の香の沁入るやうな嫩草にうづくまつて、暫しこの音に聴きとれる。

折柄雷電の如き轟を殘して、汽車は土手の上を走る。蜿蜒たる煙を吐いて轍の數がそれからそれと續く。あゝ、幽玄の曲は跡もなく破られて了つた。

二 瀑の音

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは漱石の新俳句時代ので、

あら瀑や満山の若葉皆振ふ

漱石
夏目金之助氏
の號。

と云ふのだ。これは如何にも瀑の音の雄大を目前に聴くやうで、一種積極的な感に打たれる句だ。初裕を著た裾の軽い旅姿で、喘ぎく、細い路でも上つて往くと、しつとりした若葉の匂が鼻に満ちて来る。段々汗ばんだ體軀も冷りとするので、もう瀑の所に近づいたなとおもふと、どうつと雷のやうな音を連續させて、それが木立や岩の疎密の加減で強く聴えたり、また少し弱くなつたりして居るうちに、さとい霧が面を拂つて、つい數歩前に見上る白簾が現はれ、巖に激する凄じい響で、其處らあたりの青葉若葉

は搖ぐ計りに大きい音がしてゐる。

そこらの崖の上には赤い躑躅が照つてゐたり、また薄紅の八鹽の花が翠巒の中に、ぼつりくと模様のやうに咲いてゐると云つたやうな光景を想ひ出す。同じ瀑の音でも何處か閑寂な感じのするのは、彼の

芭蕉翁の、

ほろくと山吹散るや瀧の音

といふ句だ。

春が段々長けて、山吹の花も瓣の端が白くなつて、風もないのにほろくと散ると、其處らに餘り大きく

芭蕉翁
松尾桃青の
號、徳川時代
の有名なる俳
人。

ない瀧があつて、とうくと響いてゐる。其の裾には水車もあらう。また杉の林もあらう。日は麗かに照つて背中がほかくするのて、路傍の石に腰を掛けてゐると、雉子が向ふの山際で一聲朗かに鳴く。するとまたしても山吹がほろくと散つて、瀧は同じ調子でとうくと響いて居ると云つたやうなことを聯想させる（耳の趣味）

六 甲板より友に

第一信。 船は今、西へ西へと全速力にて進み居り

候。見渡す限り、海また海、雲また雲の渺茫たる境に出でては、さすがに故國の空なつかしく眺めやられ候。昨日より荒れ出でし風浪、今日も終日狂ひ居り候。重き雲は低く垂れて、檣頭を壓し、荒き浪は舷に碎けて船體の動搖甚だしく候。朝より船室に閉籠りて身を床上に横たへ候が、折々は揺落されて、輾轉致す有様、船には自慢の私も随分苦しめられ申候。文字の亂れ御判讀下され度候。匆々。

第二信。 漸く風もなき浪も靜かに相成候。苦しかりし印度洋も今日渡り終へて、明日は紅海に入る

Rhine

Marseilles

べく候。地中海に乘入り候もはや遠からぬ事に候。多年夢寐の間に往來せし西歐の地も、やがて眼前に展開する事と思へば、徐に心の躍るを禁じ難く候。旅程を案じ候に、志し候ライン河畔の客舎に辿り著かむは、まさに行く春の細雨蕭々たる折に候べし。されば聞え上げん感興の殊に深く殊に多かるべきを豫想して、今より樂しみをり候。勿々。

第三信。 長き航海も終りて明日はマルセイユに入港致すべく候。満船の洋人達が故郷近しと勇み立ち候を見るにつけても、我は愈、異郷の客と相成候

事を感じ申候。あゝ、再會燭を剪つて墨堤の草廬に舊を談ぜんは、そも何れの日ぞ。謹んで君が文運の新ならむ事を祈上候。頓首。
(作文及び文法要説による)

七 ラインの旅

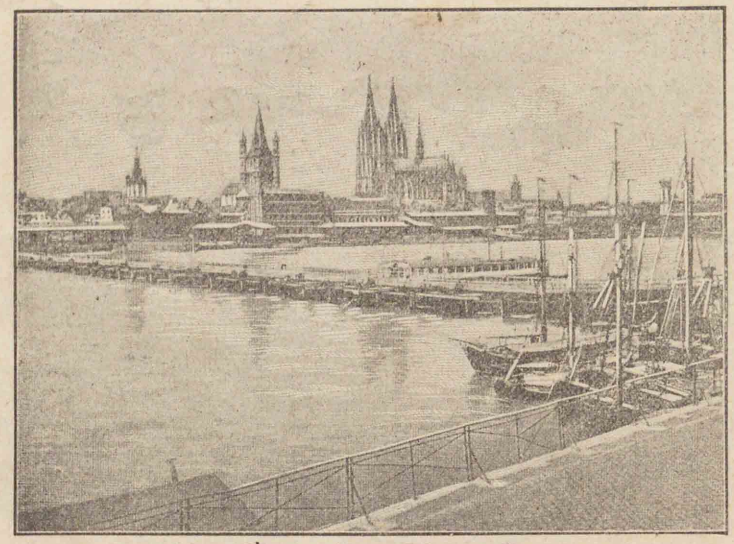
Alps

アルプの雪が融けて流れるラインの河、其の水の清い景色は、昔から多くの詩人が詩に作り歌に詠んで褒めてゐる。此の河は瑞西の山から出て獨逸の國の平野を流れ、末は和蘭の海に注ぐ。鐵道のなかつた頃には、歐羅巴の南と北が、主に此の

Charlemagne (Charles) Napoleon Caesar Venice

河で聯絡を取つてゐた。亞細亞で出来る絹織物や
其の他の珍しい品物は、先づ地中海を渡つて伊太利
のヴェニスに着き、ヴェニスから馬や車でアルプの
峠を越えると、此のライン河が受取つて、北歐羅巴の
各地へ其の品物を撒散らす。従つて此の河岸の地
方は昔から開けてゐて、羅馬時代にすら立派な都會
が幾つも出来てゐた。シーザーも此の河の岸へ軍
隊を繰出した、シヤールマンも此の地方で度々戦ひ、
近くはかのナポレオンも幾度か此の河を渡つた。
河沿の町よ古城よ、若し御前たちが物言ふならば、如

Cologne



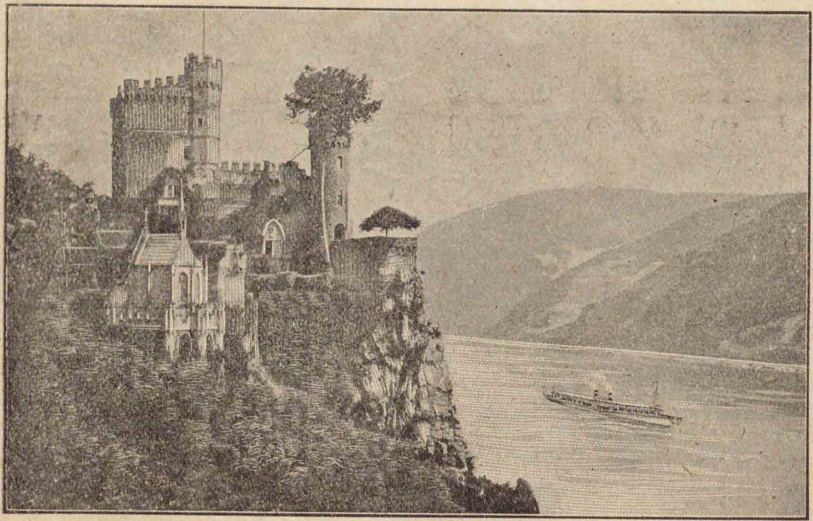
市ンロコ

次第に溯る。空氣は清く水は澄んで、此の世の垢は
何計ばかり興味ある昔語を聞かせるであらう
に。河の西岸にコロンと云ふ繁華な町がある。私
は其處から小さな河蒸氣に乗つてライン河を
溯つた。コロン町の大寺の塔もかくれて、船は

七 ラインの旅

洗ひ去られる心地がする。河は一曲り毎に狭くなつて、或時は大きな巖の傍を通り、或時は壁の様に切立つた懸崖の下を通る。

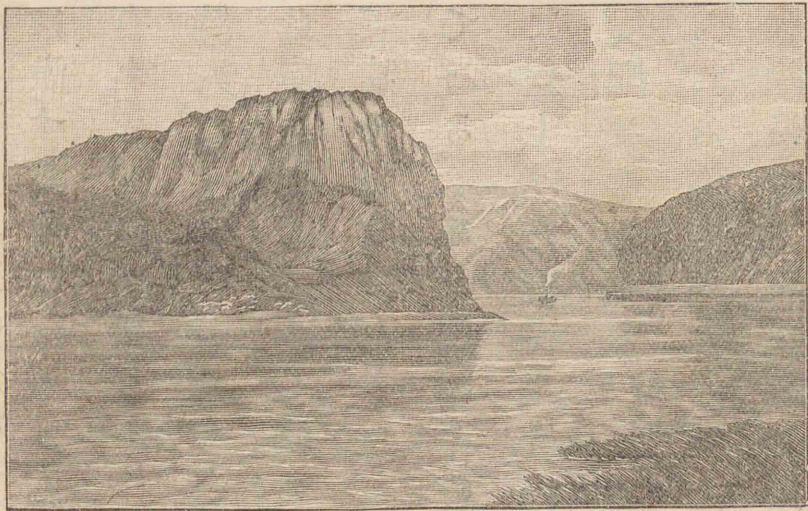
乗合の一人が「あれ、ラインの古城が見えます。」と教へてくれた左岸の山の頂を見れば、不思議な形をした石の建物、大きな四角の塔に小さな怪しい窓があつて、それに鐵の格子が箝めてある。一方の壁は半ば崩れて、其處に蔦葛の這ひかゝつた有様など、見るから陰氣な感じを與へる。是より河上には斯様な古城が數多く残つてゐる。是等はすべて中世紀の豪



族が住んだ城である。其の豪族と云ふも實は山賊同様なもので、土地の百姓達を壓迫して貢物を取つたり、ライン通ひの商人を殺して品物を掠めたりしたものを城のである。ライン河の兩岸は有名な葡萄の産地で、段々形

に開墾された岸の小山は一面の葡萄畠で、丁度雛壇の様に見える。其の小山の裾には葡萄棚に囲まれた小さな白い百姓家があちこちに散ばつてゐる。秋になつて葡萄が實ると、此處の村人は朝から晩まで葡萄摘でそれはく、忙しい。摘んだ葡萄は搾め場へ運んで、搾めるのは夜の仕事、其の時節には一日程、夜もろくく、寝ずに働く。併し收穫の秋の忙しさに引かへ、安息の冬はラインの谷の村々が暢氣な世界に變つて、蠟燭の火の赤くさす藁屋の窓から、夜會の歌が楽しさうに聞えると云ふ。

Coblenz



コブレントツの岩

汽船はコブレントツに着いて暫く止つた。此の町は羅馬帝政時代に建てられた古い町で、旅人の心に一種の懐しい感じを與へる。コブレントツを離れると河は小山に挟まれて愈々狭く、而もろくくと曲りかねる。暫くすると前面に大きな巖が突出して、それ

Bingen Germania Heine Lorelei

に激する河水が煮え返る様に泡立つてゐる。是が有名な傳説を持つローレライの巖で、それを歌つた詩人ハイチの詩も亦有名なものである。此處を過ぎて少し溯ると、普佛戰爭の戰勝記念として建てた女神ゲルマニアの銅像が向ふの岡に立つてゐる。八十尺の石の臺座の上に立つて、片手を空に差上げた雲突くばかりの巨像には、歐洲の天地を支配せんとするが如き誇が見える。之を見せ付けられる佛蘭西人は、逆も敵愾心を起さずにはゐられない譯だ。此の記念像の對岸には美しいビンゲン

Mannheim Gutenberg Mainz
Heidelberg
Strassburg
Basel

の町があり、町に近い河中の小島には怪しい傳説を持つた鼠の塔といふ石の望樓がある。鼠の塔を横に見て少し溯ると汽船はマインツの町に着いた。私は此處に上陸して二千年前の建物と傳へられる羅馬塔や、活版の開祖グーテンベルヒの舊宅などを見物し、それから河沿の鐵道を利用してマンハイム・ハイデルベルヒ・ストラスブルヒなどの繁華な町を訪ねながら瑞西のバーゼルに着いた。

八 アレクサンドル大王

世界の大英雄といへば、先づアレクサンドル大王を想ひ起すのが通例であります。大王はマケドニア王^{*}フィリポの子で、紀元前三百五十六年に生れ、十八九歳の時、既に戦功を立て、二十一歳で王位に登り、三十四歳で死ぬるまで、東方諸國を伐從へ、僅か十三年間に、世界に類のない大國を建てた英雄であります。大王は幼時より、活潑で、大膽で、擊劍、狩獵等を好み、駢足が疾く、殊に馬術が上手でありました。或時父王フィリポの許に、駿馬を賣りに來た者がありました。「どんな馬か、一つ試して見よう。」と馬場へ引出して、父

王の侍臣達が乗つて見ましたが、非常の悍馬で、誰も之を乗りこなすことが出来ません。それで父王は「こんなものは役に立たぬ。」といつて、返さうとします。先程から、傍で此の有様をぢつと見てゐたアレクサンドルは、「こんな良い馬を、乗りこなすことの出来ない爲に失ふのは残念だ。」といひました。父王は、初は此の言葉を氣にも留めずにゐましたが、度々繰返していふので、どうして御前はそんなことをいふのか。大人さへ乗れないものを、御前に乗れると思ふのか。と問ひますと、アレクサンドルは、「はい、私はあの人達

よりは、よく此の馬を扱ふことが出來ます」と明瞭に答へました。

父王が重ねて、「おゝさうか。きつとさうか。それで御前乗つて見るがよい」といひましたので、「はい、乗つて見ませう」と直ちに準備に取掛りました。人々は、アレクサンドルが小さいくせに、生意氣なことをいふと思つて、笑つて居ました。アレクサンドルは馬の傍に進んで、先づ手綱を取り、馬の首を太陽の方へ向け變へました。これは、先刻から、馬が自分の影に驚き騒ぐのに氣が附いて居たからであります。

それから、馬を少し前の方へ引き、少しでも荒れさうになると、首を叩いてなだめて置いて、やがて、ひらりとばかり飛乗りました。そして、次第々々に、靜かに手綱を引きしめて、鞭をあてたり、勵ましたりせず、穩かに馬をあしらひました。

かくすること少時、漸く馬が從順になり、今は唯驅け出した、一心になつて居るのを見て取つたから、アレクサンドルは掛聲諸共に、疾風の如く驅けさせました。

父王や、侍臣達は、どうなる事かと息を凝らして見て

Aristoteles
(Aristotle)

居ましたが、アレクサンドルが馬場を一廻り乗りまはし、悠々と馬を下りるのを見て、一同その馬術の巧みなのを感じ、喝采の聲は少時鳴りも止みません。父王は喜の餘り、涙を流して、彼を抱き上げたといふこととであります。

Homeros
(Homer)

此の世界の大英雄は、世界の大學者アリストテレスを師として、道德政治文學の事から、醫學の事に至るまで、その教を受けましたが、元來學問が大好きなので、著しい進歩をしました。殊に、ホメロスといふ大詩人の書いた古代の英雄物語を愛讀して、枕邊には

常に短刀と此の物語とを置き、武士道の精神を養ふには、これほど貴いものはない。といつてゐたさうであります。又、師アリストテレスを父の如く敬愛して、常に「我に生命を與へたものは我が父である。我を善くしたものは我が師である。」といつて、師恩の大なることを感謝してゐたさうであります。

當時、マケドニアといへば、最も強く、榮えてゐた國でありました。アレクサンドルが此の國の王子に生れながら、普通の富貴の子弟の様に、懦弱・暗愚なものにならなかつたのは、全く、彼の志が高く、大きかつた

からであります。

大王は、父王の權威を笠に著、又、奢侈安逸な生活をすることは、大嫌でありません。幼い時から、肉體の快樂を節制する克己の美德を持ち、又、艱難辛苦と闘つても大功名を立てようといふ、燃ゆるが如き大望を抱いてゐました。

父王フィリポが、他國を征服したり、強敵に勝つたりした報知が来る毎に、アレクサンドルは子供心に喜ぶと思ひの外、悲しんだといふことであります。それは、父王にまづ世界を征服せられてしまつては、自

分の大功名を立てる餘地がなくなる事を憂へたのであります。父が如何ほど大事業をなしても、その子が、それ以上の大事業をする事の出来ない道理はありませんが、大王が父王の如き偉い人の後を繼いで、富貴の樂しみを極めようとせず、もつと亂れた争のある國を引受けて、大智勇を顯し、大功名を立てて見たいといふ遠大の志を抱いて居た事は、この一事を見てもよくわかります。實に、大王はその志の通り父王の大事業の後を承繼いで、猶それ以上の大事業を成したのであります。(亘理章三郎「少年鑑」に據る)

靖國祭
東京九段坂な
る靖國神社の
祭禮。

九 競馬

私は靖國祭の競馬に是非加つて見ようと其の日の來るのを指をり數へて待つて居た。さて待ちに待つた五月六日は日本晴の好い天氣で、朝からして早幾萬の參拜者は競馬場の周圍につめかけ、七重八重に人垣を造つて居る。

十五回目の勝負がすむと、各隊聯合の大競馬がくみあはされた。砲兵の殘雪と宮野、輜重兵の鯨波と羣雀、それに私の乗つた騎兵の金石とである。見よ、馬

場の起點に頭をならべた五頭の馬匹を。孰れも各隊選りぬきの名馬で、特に鯨波は去年も各隊の聯合競馬に一等賞を得た逸物。其の他宮野といひ、羣雀といひ、何れ劣らぬ駿足。また殘雪は某聯隊長の副馬で、みな侮る可からざる強敵である。しかし金石も輕々しくひけを取るべき馬でない。

金石は磐城國田村郡三春の産で、當年七歳、身幹四尺八寸、體量九十三貫、紅鹿毛、特徴は新月形の星額、頭は輕く眼は澄み、威があつて實に完美な馬である。が、一つ恐るべき癖がある。若しも彼の左の犬齒へ大

銜が一寸でも觸れたらそれこそ一大事、溝でも岡でも何處と云ふ差別なく、狂ひ奔るのである。此の場合には如何に巧な乗手でも、彼が大障害物に衝突して、かれ自身止るまでは決して御し得ぬ難物である。しかし私は未だ一度もその癖を起させない。私は聊か彼を御する秘訣を自得して居る。とにかく有名な癖馬であるから、これまでの競馬には誰も乗手が無かつた。従つて彼の眞の速力は世に知られなかつたが、今此の一組の勝負でもつて、わが金石が師團第一の名を得る時節が到來したのである。

棧敷で見物してをる各隊の將校は勿論、下士卒に至るまで、口にくそ出さね、騎兵に負けるな、輜重兵に勝たすな、砲兵に劣るなと、各自分の最負々に手に汗握り、肩を怒らして力んで居る。嗚呼、この勝負果して如何。この晴の場處でも私は寧ろ自ら信ずる所があるため平氣であつた。しかし金石は私よりも尙平氣であつた。一度この馬場を踏んだ馬は、既に頭を竝べた時、鬣立ち眼怒り、或は前肢を舉げて空をたゞき、或は後脚を躍らして土を蹴り、今にも飛出さうといふ勢で、助手の二人も附いて兩口を取つて控

へて居ないと、合圖まで待ちきれない有様である。然るに私の乗つた金石は四足を揃へて正駐立の姿勢を取り、靜かに命令を待つものゝ如くであつた。待つ間程なく、競馬係は時刻を計り、注意の聲と共に前進の合圖を鳴らした。待構へた乗手が、韁を弛めると同時に、五頭の馬匹は吾先にと駆け出した。その速さは何ともいへない。余は起點から約五六百メートルの間は只前馬の尻について行くのみで、少しも逐はない。此の時の位置は第一が鯨波、第二が殘雪と羣雀とて、第三が宮野、最後が金石である。第

一の鯨波と私の金石との間は既に五六十メートルも離れて居る。數千の群集は「騎兵負けるな〜」と囃し立てるが、私は少しも逐はない。注意して見ると、前の四馬とも皆手前を誤つて右驅歩に出して居る。七百メートル、八百メートルの處では殘雪が眞先で、鯨波と羣雀とが雁行し、宮野が余の前に居る。互の距離は段々遠く、見物は益々叫ぶ。九百メートル、千メートル、まだ同じ位置で、約全距離の三分の二を經過した。最早時分は宜しと、私は軽く拍車を入れた。今まで

前進力を抑へられて居つた金石は、一時に逞しく其の歩程を伸ばした。繰りだす前足の膝頭は耳の高さまでも揚り、馬の腹は地を摺るがごとく、伸ばしきつたる四足は、同時に踏打ちする一節の驅歩のやうである。私は少しく上體を前に傾け、韁をつめ、又も二つ三つ拍車を加へた。見る／＼宮野を乗越え、鯨波を追抜き、殘雪に竝んだ時、はげしい喝采が起つた。私は態と殘雪に竝んで、百メートル許り外側を進行した。其の間相手の姿勢を見るに、拳上り韁伸び、騎座浮き、さうして拍車を亂打して居るけれども、始か

ら全力を出した馬はもう少しも感じない。こゝに至ると金石はまだ／＼推進力が十分ある。

いざ一つ人目を驚かさうと、私は強い拍車を二回入れた。金石は小振ひして、忽ち殘雪の鎧をこすつて、電光石火の勢で猛進した。其の快速なこと、實に鞍の上に人なく、鞍の下に金石なく、唯一陣の疾風である。先登第一は無論である上に、決勝點に到着した。金石は合圖の砲聲と同時にびたりと駐止した。其の手練の立派さ、自分ながら驚いた。これは余が得意の祕術を施したので、馬術の心得あるものは皆驚

いて舌を捲いた。併しながら私が名譽ある特別優等賞を得たのは全く金石が名馬であつたからである。
(某騎兵の作による)

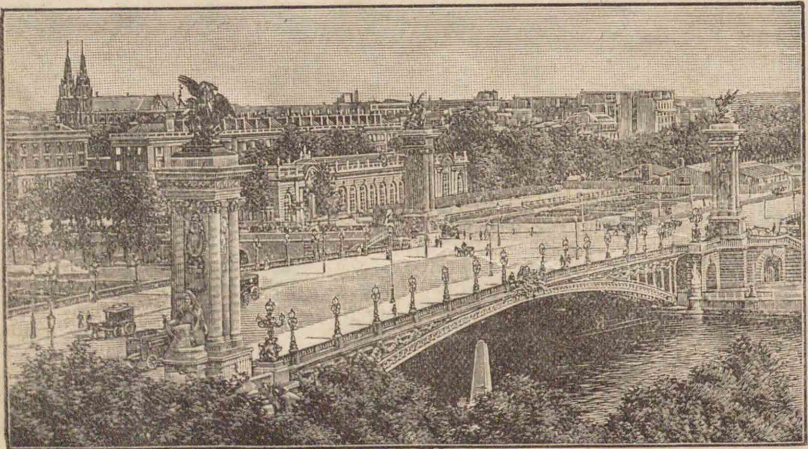
一〇 巴里の五月

島崎 藤村

山羊の乳を賣りに來る男が朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとするものがあるれば、すぐ其の家の前で新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。

た。夢のやうに寢床の中で耳を澄すと、遠い牧場の方からでも、若草を吹く五月の風が、とぎれ／＼に持つて來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳つて來て、何かかり自分等の心の底に眠つて居るものを誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛

橋 - ダンサキレマ 巴



Melody

を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、この山羊の乳賣の笛の調子が何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔かな音です。巴里のやうな大きな都市の空氣中にも、かうした牧歌的な情調を傳へる細い幽かなメロデーが流れて居るかと思ひました。

只今は當地でも最も楽しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて若葉に變つて行くやうな趣は當地には見られませ

Platanus

んが、でも春の過ぎて行くといふ心地が私の胸に深く浮んで參ります。日にく、茂つて行くプラターナスの竝木の若葉が、少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の満ちた時、五月らしい雨が來て、柔かな新緑の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだとおなじやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて絶えず形をかへるのを望みます。長い黄昏時がまたやつて來るやうになりました。恐らくこの黄昏時は暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、

つとく長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日と丁度反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくして了ふでせう。

地帯から言つて、當地が北海道あたりに近いことは鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、矢張北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には當地の町々で鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福の象徴として胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。(平和の巴里)

一一 燈臺守

藤井乙男

佛蘭西の西岸に近き某の島に燈臺あり、マトローといふものこれを守りぬ。或日マトロー燈臺に上りて、常の如く掃除をなし居たりしが、俄かに重き病さし起り、掃除半ばにしてその室に下りそのまゝ床に就けり。マトローの妻は心を竭して夫を看護せしが、病些かもおこたらず、氣息奄々として死期の遠からざるを覺えぬ。醫藥效を見ず頼むところは唯神のみ。妻はひたすら神に

祈りぬ。

とかくする程に夕暮は迫りぬ、黄昏の色は漸く海を蔽ひぬ。病の床は離るべからず、床を離るれば瀕死の夫を如何にせん、燈臺の燈は點ぜざるべからず、燈を點ぜずば夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益深くなりぬ、黄昏は海を蔽ひつくしぬ。「吾等の務なり、吾等の務なり、務は曠しうすべからず。妻はかく思ひさだめぬ。かくて夫の病床を後に、心ひかるる身を起して、妻は燈臺に上りぬ。

燈は明かに海上の闇を照せり。夜の船路のしるべ

として、今宵も明かに海上の闇を照せり。

妻は急ぎて夫の室に歸り、氣つかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事をか見し、最後の息は、この時絶えて、冷たき唇は見る見る色を變じゆけるなりき。妻は顔を掩ひて、心ゆくばかり泣きぬ。

をりしも、一人の兒驅け來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。この燈臺は、回轉式のものなるを、マトローの掃除中、機をはづしたるまゝ下りければ、さてはかく回轉せざるなりけり。

若し捨て置かば、出入の船の見誤りて如何なる椿事

もや起らん、捨て置くべきにあらずと、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺にいたりて機を装置せんとせしが、幾度試みても機は外れて、依然として回轉せず。今はせん術なくて、年いとけなき二人の兒を呼び、その小さき手もて、夜もすがら、燈を回轉せしめぬ。燈は回轉しつゝ、海上の闇を照せり。夜の船路のしるべとして、今宵も回轉しつゝ、海上の闇を照せり。悲しき一夜はかくて明けぬ。この夜安全に島邊を航せし船は、たゞ常の如く明かに、常の如く回轉せるこの燈臺の燈を望みて、健氣なる妻と子との心づく

○

しの如何ばかりなりしかを想はざりしなるべし。何ぞ知らん、明かなる燈光は、これ悲しき妻の真心の光にして、回轉せる燈影は、これいぢらしき兒の夜の目も合せず務めたる丹誠の働なりしことを。この夜のことは、後に至りて傳へられ、世人は舉りてこの健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社は、この誠意公に奉じたる母子のために義金を募りぬ。あゝ、ありし一夜の燈は、如何に清き光を放ちて、島邊の闇き波の上に、影美しく輝きけん。

同社中
松下塾の塾生
等をいふ。

一二 一燈錢

久阪義助

此の度同社中申しあはせ、自分々々の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、囊中拂底にては差支ふるものに候。有志の人の、牢獄に繋がれ、又は、飢渴に迫り候ものも、おひくく相助けたく、義士節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡し、手を伸したき事に候へども、同社中、有餘の金もあるまじき事に候へば、毎月、寫本なりともして、僅かの貯蓄致し置きたく、月末、松下塾まで、銘々持寄り致すべく候。

松下塾
長門國萩の東
郊松本村なる

吉田松陰の塾。

貧者の一燈
昔王と貧女とあり。王は佛に萬燈を供し貧女は一燈を供したるに、王の萬燈は風のために消

半年にもせよ、一年にもせよ、塵もつもれば、山となる理にて、きつと、他日の用に相立つべく考へられ候。尤も、同社中、身の膏を搾りだして、集むる事なれば、迂闊に費すべきにあらず、已むを得ざることあらば、同社中申しあはせの上にて、取揃へ申すべく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の身ならば、なほ、如何様にも相計ふべけれど、我々にては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理は、よもあるまじく候。これに依つて、この度取立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

え、貧女の一燈のみは消えざりきと。佛經に見えたる故事。

先師 吉田松陰。秋侯の臣にして、幕末憂國の士なり。

一、毎月寫本六十枚づつ村塾まで必ず持ち寄るべく候事。

一、寫本料は先師の定むる所、真字十行二十字五文片假名、同斷四文の事。

一、一日僅かに二枚づつの事なれば、さまで勉強のならぬ事はあるまじ。もしこの枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持寄り、これあるべき事。

右の條々、この度申しあはせ候。これ式のこと、骨を惜しみ候程にては、我々の至誠つらぬき候ことも覺束なく候やう、相考へられ候。銘々きつと怠らぬ

やう致したき事は、申すもおろかに候。以上

一三 長藩の志士

中川 克一

一 三士闕下に伏す

文久三年 孝明天皇の御代(二五三)

文久三年四月、久阪義助、玄瑞、寺島忠三郎、昌昭、轟武兵衛、照武、相議して曰く、朝廷攘夷を以て國是となし、幕府遷延依違す。而して公卿諸侯其の間に周旋するも寸效を奏せず、苟偷此の如し、何ぞ底止する所あらん。我等陪隸と雖も亦皇國の臣民、至誠豈九重に徹せざらんや。と。乃ち齋戒沐浴身を淨うし、食を絶ち、

元徳
毛利敬親の養子。

天龍寺
京都郊外嵯峨にあり。京都五山の一。

關白鷹司
當時の關白は鷹司輔熙。

久留米藩
有馬侯二十一

關下に詣り泣血上疏し、以て攘夷の期日を請ひ、地に伏して動かず。

時に長藩世子元徳、天龍寺に館す。之を聞き直ちに馬に鞭ち大雨を冒し、關白鷹司邸に詣り之を告ぐ。

關白大に愕き、直ちに參朝して之を奏す。天皇感納し給ひ、直ちに在京の公卿諸侯を召し、會議すること

二日、即ち攘夷の期日を天下に布告す。當時志士至誠、上下一致以て國家に盡すの状を見るべし。

二 久阪義助の至誠

久留米藩士某曾て天王山の長軍に従ふ。後常に人

萬石。城下は筑後國久留米にありき。

天王山

山城乙訓郡山崎村の附近に在る山。蛤御門の役に敗れて後通武は暫く此の山に據り再舉を圖れり。

に語りて曰く、余の天王山にあるや、主將久阪義助日に練兵を爲さしめ、時々遙かに京都を瞻望し泣いて曰く、我が公の精忠日月と光を争ふ。而して雲霧蔽

おのれをよきとせしめしめ玉ふらん
世をよきとせしめしめ玉ふらん
世をよきとせしめしめ玉ふらん

久坂義助筆蹟

塞し、天闕咫尺なるも、尙詣ることを得ず。臣等

の罪大なり。」と。夜は諸營を巡視して兵を談じ且曰く、「天運循環將に遠きにあらざるべし。公等幸に勉めよ。」と、袖中より酒一瓶を取出して曰く、「此の物陣中

の嚴禁なりと雖も、聊か公等晝間の勞を慰す」と。衆皆感泣したために死せんことを願へり。其の言貌歴歴として今猶耳目に存し忘るゝこと能はず」と。

三 入江九一砲口を抱く

入江九一名は弘毅野村靖の實兄にして、松陰門下の名士たり。人と爲り仁慈禮讓を重んじ、溫厚篤實母に事へて孝、弟妹に友なり。常に微笑を含んで人に接す。人過失あれば諄々として道理を説きて之を諭し、未だ曾て勵聲罵辱することなし。故に人も亦其の誠實に服し、敢て違反するものなし。

長藩攘夷の事

文久三年五月十日、長藩は攘夷の聖旨を實行せんと欲し、米の商船ベンゲロープ號を下關に砲撃せり。

元治元年 孝明天皇の御代(二三四)

文久三年、幕府監察中根市之丞軍艦に乗じて馬關に來り、長藩攘夷の事を詰問するや、奇兵隊深く幕府を憤り之を砲撃せんとす。九一曰く「軍中敵使を殺さざるを以て禮となす、況や幕府の使者をや」と。百方之を制止す。而して少壯輩聽かず、事益々急なり。九一走りて砲口を抱き言を勵して曰く「必ず發砲せんと欲せば、先づ吾を碎け」と。衆乃ち止む。其の事に臨みて勇敢なる此の如し。元治元年久阪等と同じく鷹司邸に屠腹す、年二十有七。其の松陰先師の墓前に梅花を捧ぐるや、詠じて曰く、

年を経て變らぬ梅の花の香は

手向くるさへも心はづかし(偉人百話)

一四 恩を忘れず

湯淺常山

福島正則豊臣秀吉の臣 下にして豪勇の武士。關ヶ原に功ありたれども、後徳川の爲に川中島へ流さる。常福島正則に物あらく、人を誅する事を好めりと、世の人のいひあへり。或時、近習の士少しの過ありければ、城内の櫓に押しこめ、食物を與へずして餓死せしめんとす。こゝに一人の茶道坊主嘗てその士の恩を受けたることありしが、今この有様をいたみ、夜潛かに焼飯を携へ行きて與へたり。かの士、汝が只今

のふるまひあらはれなば、われよりも罪重からん。われは飯を食ひたりとて、命助かるべきにあらざれば、とく歸れ。」といふ。茶道更に「同じ罪に行はるとも後悔せじ。恩を受けて報いざるは人に非ず。此方も亦弱げなる心おはして、わが志を空しくし給ふは、口惜しき事なり。」といへば、士悦んで、さらばとて、これを食す。夜毎にかくの如くしたり。程経てもはや死したるならんとて、正則櫓に行き見しに、士の顔色少しも衰へず。正則さては飯を贈りたる者あるべし。」と怒りしに、茶道さし出でて、「某贈れ

り。」と申す。正則はたと睨みて、「おのれ何故にかくしたるか。頭二つに切割らん。」と膝立て直せば、茶道は騒がず、「われ前に罪を得て、既に水責にあひて殺さるべかりしに、かの人の申しひらきにて、今日までも命ながらへ候。その恩を報いん爲に、毎夜忍びて飯を運び候なり。」といふ。正則怒れる眼に涙を流し、「汝が志感ずるに餘りあり、人はたれもかくこそあるべけれ。士をも免すべし。」とて近習の罪を宥め、深く茶道を賞しけり。正則を暴悪の人と世に稱しけれど、士の思ひ慕ひて力を竭し、身を棄てて奉公しけるも、か

くの如く義に感ずる事の切なる故なるべし。(常山紀談)

一五 山田長政

府中
今の静岡市。

駿州府*中の大商人、戸田喜左衛門、太田次郎左衛門の持船怪神丸が、裾野を煽る野の風に帆綱を調べ、貝殻光る春の磯に舟子の唄もゆらくと、駿河灣を乗出してから三日目の晝、水脈も靜かに海若の夢も亂れず、命知らずの舟子達も、日本晴の極樂と車座になつて午餉の飯櫃を持廻る眞最中、突然のこくと船底から這出した屈竟の武士があつた。

「やあ、貴殿は府中で同船を御斷りした御武家ぢやな。何として今日まで。何處に隠れて來られた。」
商人ながら骨のある喜左衛門は、脇差を引付け屹と睨んで片膝立てた。一同の者も鐵の腕を叩いていざといはゞ飛蒐らん氣勢を示した。が武家はびくともせぬ。太く濃い眉の下から刮と見開いた兩眼に笑を見せて、
「おうさ、この船で臺灣まで同行を頼んだがきいてくれぬ。よつて密かに船底に潜んでごろりと寐たが、船も大分沖へ出た様子ぢやから起きて參つた。俺

も同じ日本の者ぢや。交誼があらばこのまゝ渡海の仲間に入れて貰ひたい。否とあれば致し方がない。波を歩いて戻りもなるまい。この大劔に物云はせう。」と、下緒を扱いて、襷に取り、刀の鯉口ぶつりと切つて隙もなく身構へた。喜左衛門も次郎左衛門も身をひいた。舟子どもの顔色も蒼くなつた。
「あゝ、海上の晴れたは又格別。ぢやが飲まず食はずの寐通して大分空腹になつた。御無禮ぢやが馳走にならう。」

武家はどさりと船板に胡座をかいて、手近にあつた

大盃を取上げると、喜左衛門は頼母しげに進み寄つて酌をしながら、



山田長政

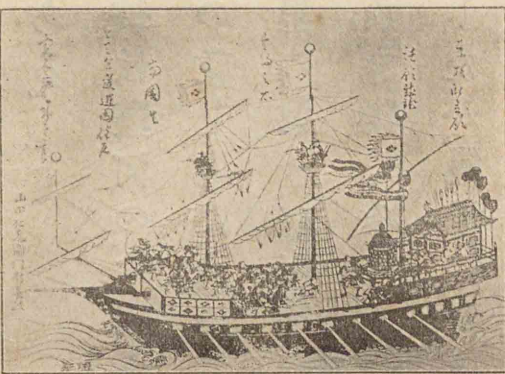
かに變る上々機嫌、武家も厚く好意を謝し、潮に吹か
る、手枕に船子の歌を聞きながら、波路に愉快な日

「お若いに似ず立
派な膽力、ひたす
ら感じ入りまし
た。如何にも臺
灣まで御送りい
たしませう。」と、俄

敷を重ねて、遂に志す臺灣に着いた。

この武家こそは誰あらう、即ち山田仁左衛門長政で
ある。

彼は駿河の片田舎に生れ、父が生活の業にする紺屋
の乾し場に、竹馬を乗廻す頃から武藝を好み、二里三
里の遠き在所へ、竹刀かついで、の道場通ひを此の上
なき樂しみとして居た。父母も初は將來を案じも
したが、亂世の習はしとして、鏢ぜり合ひに一城一國
の受渡しも出来る世の中、強ひて兩腕を藍瓶に染め
させるでもあるまいと、爲すが儘に任せて置いた。



山田長政奉納の額面

長ずるに及んで、天晴れ一廉の劔客として天下を濶歩するだけの腕前になつたので、彼は伊勢の祠官に據つて長政といふ名を貰ひ、父亡き後は武者草鞋飄々として故郷の空を立出でたが、或日府中の宿に泊つて、隣の室に語り合ふ客の噂をよい手蔓と、臺灣通ひの商船に身を托し、奇策を用ひて首尾よく目的地へ渡つたのである。

百尺の竹十丈の棕櫚、見る眼新しき蠻界の風物は、長政に取つて好個會心の活舞臺であつた。彼は豪刀を楯に、單身蠻界を征服して武名を擧げ、日本から渡來する船主の間にも鬼神の如く崇められて居た。當時日本は徳川家康の掌中に國權を捏ね返され、野火の焼跡茫々たる有様であつたから、外國との交通貿易の取締りまでは手が届かぬ。この機會に乗じて、大阪或は泉州筋の寛濶なる船主は、死装束の船頭に金花を撒散らして、冒險的な航海を企て、臺灣から暹羅・南洋一帶へかけて、自由に貿易を行つて居た。臺灣に於ける長政の威名はこれ等の船の便りに依

大阪落城
元和元年(三
七五)

六昆
今の馬來半島
中にある「六」
の町附近の
地。

つて、雷の如く暹羅にまで轟き渡つた。

これより先、大阪落城に前後して難を遁れた豊臣の家臣は、關東家康の配下に附くを嫌つて暹羅に落延び、國王より椰子茂る廣漠たる一部落を貰ひ受け、茲に傳來の具足を脱ぎ田圃を拓いて、日本町の一區劃を建設した。この日本町の住民どもは、長政の高名を慕ふの餘り、懇ろなる禮を盡して長政を迎へた。長政は快諾して暹羅に乗込み、日本村の首領となつたが、其の後暹羅國王の依頼を受けて叛賊を平げ、續いて敵國六昆ハ、ゴレを征服し、遂に其の國王となつて不朽

の英名を海外に輝かした。(平井晚村歴史物語血吹雪による)

一六 臺灣の夏 大島久滿次

臺灣の真相は夏に行つて見るのが一番よく分らうと思ふ。世人は一般に臺灣といふ所は非常に暑い處だと思つて居るが、決して世人の思ふ程暑い所ではない。成程屋外では百度以上の事も往々あるが、室内では平均九十一・二度から六・七度位のものだ。そしてそんな日は一年に僅か數日しかない。尤も同じ臺灣でも、北部は氣温の低い割合に水蒸氣が多

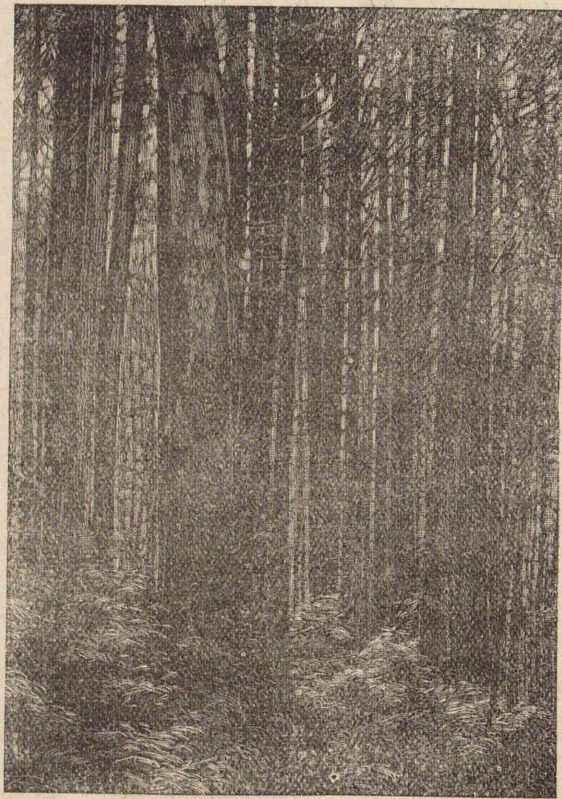
いから蒸暑くて堪へ難く、南部は氣温が高いが、空氣がからつとして居るから比較的凌ぎ易い。又よい事には、あゝいふ島國だから始終海風が吹いて來る。そのために暑さが餘程減殺されて居る。夕方になると風が少し凩ぐが、夜の九時頃から復涼風が吹いて來て、一日の暑さを忘れることが出来る。月夜などには空氣の關係でもあらう、月が内地よりは餘程鮮明に見えて、夏の最中に於ても已に内地の中秋の月の如く澄んで見える。だから月夜の愉快は遙かに内地に優るのである。それから臺灣で恐

るべきものとしてゐる種々の風土病の流行するのは、却つて春とか秋とか時候の移り變りの時に多いのだから、此の點からも夏の方が旅行者にとつて安全である。臺灣は水は餘りよい方ではないが、併し暑中でも水に缺乏するやうな事は殆どない。今の所、水に缺乏して居る場所といへば先づ嘉義位のものだ。臺北の方はもう上水道を設けて居るが、嘉義には適當の水源地を發見するのに困難を感じて居る。臺灣で一番困るのは晝の蠅と夜の蚊。之には誰で

嘉義
嘉義廳所在
地。臺灣鐵道
縱貫線に沿
ふ。
臺北
臺灣島第一の
都市。

も少からず弱らせられる。食事などをするにも蠅が眞黒に集つて之を追ふのに忙しい。併し今日では下水の設備が大分出來たから、臺北などでは餘程減つたといはれて居る。蚊は春夏秋冬の四季を通じて多い。冬でも蚊帳を釣らなくてはならぬ。が一番多いのは夏の始と終とで、暑さの最も強い時には却つて蚊が減る。此の點から見ても夏の盛りが旅行者に一番便利だ。臺灣の樹木は冬でも殆ど落葉しないから、夏になつても餘り景色が變らない。平地は土人が樹木を切盡して植林しないから、見る

に足るべき樹木が少いが、足一たび蕃地に入れば、古



臺灣の檜木林

木老樹鬱蒼

として、とて

も内地では

見られぬ光

景である。

平地では相

思樹とか榕

樹とかいふものがあつて夏の光線を避くるによい。南部ではソワヤといふ樹が多い。山へ行けば檉・椎

Cider

胡桃等が主なるもので、上の方へ行くと檜が多い。臺灣人の着物には別に特徴はないが、一般に内地よりも白いものを多く用ひる。食物は夏でも別に變つたといふものはない。一體臺灣人は餘り生水を飲まない、氷水などは殆ど飲まないから、氷屋は一向繁昌せぬ。土人はどんなに暑くても熱湯を飲む。物を冷して食ふといふやうな事は多少あるが、冷たい水や氷を直接に飲む事はない。内地から旅行したものの中には、よくサイダーや氷などを多量に飲んで胃腸を傷ふ人があるが、之さへ注意すれば夏の

臺灣旅行は極めて安全である。

家屋は皆夏の暑さが凌ぎよいやりに出來て居る。土人の家は成るべく窓を少くして光線が入つて來ないやりにしてある。内地の人も庇を深くして光線を避けるやりにしてはゐるが、内地での習慣から矢張り窓を多くして明け放しにするやりに建てゝゐる。臺灣で暑さを凌ぐには矢張り土人式の建築の方がよい。此の點は將來土人式を折衷してやつたならば都合がよからうと思ふ。

果實類としてはソワヤ・蓮房・蕉實・鳳梨・西瓜・瓜の類な

ど澤山出る。けれども臺灣の果實の特徴は冬の柑
橘類に在るので、夏の物には格別誇るに足るべきも
のがない。

一七 夏の夜

土井 晩翠

しづけき夏の夜半の空

遠き蛙の歌きけば

無聲にまさるさびなれや

眠をさそふ水の音

心しづかに流るれど

夕月山に落行けば

影を涵さんよしもなし

星夜の空の薄光

心を遠くさそひつゝ

すゞしくそよぐ風の音は

神のかなづる玉琴に

觸れてやひびく天の樂

昨日の夢とかなしみし

浮世の春はかはれども
見ずや常世の春の花

散らでしぼまで大空の

星のあなたにほゝゑむを (天地有情)

一八 螢

「螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇は只この物のためにやとまでぞ覺ゆる。」

百蟲譜
徳川時代の俳

これは百蟲譜の一節であるが、實にこの通りで、亂れ

人、横井也有
の作れる俳
文。鶉衣と稱
する書の中に
收めらる。

飛んでは、この頃の降りみ降らずみの空に何の星かと疑はれ、叢にあつまつては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。螢の美觀は、昔から人の目を惹いて、凡そ文字あるほどの國民で、螢の事を、何か多少書殘して居らぬものはない。それを讀むと、昔から世界の國々の人が、螢をいかに觀て居たかといふことが窺はれる。

さて、螢といふと直に火といふ聯想が起るであらう。現に我が國で「ほたる」といふ言葉は、火垂或は火照といふ意から出たとも傳へられてゐる。又支那を始

として、どこの國の言葉でも、螢といふ名はみな火といふことに縁がある。まことに此の火といふ聯想が螢の命ともいふべきもので、若し是がなかつたらば、恐らくは人の心を惹く事がなかつたであらう。それは同じ螢科に屬してゐる昆蟲類で、其の形が螢によく似たものも少くないに關らず、其の美しい光を缺いてゐる爲に、動物學者以外の人には少しも知られないのを見ても明かである。

さてこの螢を、春の花、秋の紅葉などと同じく、一種の景物として、昔から特に東洋の人々が賞翫してゐる

晋の車胤

晋は支那歴朝の一にして皇紀九五年より二〇九年まで、續けり。車胤は貧家に生れて燈火の資なく、螢を集めて夜間讀書し、後晉の高官に任ぜらる。

Mexico

ことは代々の詩歌文章などに見えてゐる事であるが、更に之を燈火の代りに用ひた例も晋の車胤の故事ばかりでなく、我が日本を始め西洋の國々にも少くない。

むかし北亞米利加のメキシコの海岸では、海賊が横行して通行の船舶を劫したので、其の邊を通る船人は非常に恐れを抱き、夜間の航行には船中に燈火を用ひる事を禁じ、その代りに其の地方で産する大きな螢を澤山に入れた籠を乗客に渡しておいて、夜中にも用がたせるやうにしたといふ事である。この

Petor Martyer

様な例は我が國の昔にもあつて、之を忍の提灯に用ひた事が、古い小説などに見えてゐる。

又^{*}ピーター、マーターといふ人が、發見後三十年ばかり後の亞米利加の事を書いた「新世界」といふ書の中に、その土人が闇夜に深い森の中を行くのに、大きな螢を自分の足の^レ拇指に縛りつけ、その光で足もとを照しながら歩く、その螢が弱つて、光が薄くなると、新しいのと取替へて用ひたといふ事が書いてある。

現に我が近江の守山・今宿地方では、螢の光で夜道を迎ふ習慣があるといふ事である。其の地方は一般

Cuba

寂蓮法師
 平安朝末期の
 歌人。藤原俊
 成の養子とな
 りしが、定家
 生れたるが故
 に出家せり。

に螢が多く、小川に添うた田圃道などには、其の岸の草むらに數限りない螢が聚つてゐる。そこで杖を以て草むらを叩くと、螢が強い光を放つから、どんな暗の夜でも明かに其の行手を見分ける事が出来るといふ。それで、この邊の者は、提燈の代りに一本の杖を持つて歩くさうである。寂蓮法師の歌に

夏蟲の身をともしける光こそ

闇に迷はぬしるべなりけれ

とあるは、これらの事をいうたのであらう。

又^{*}キューバ島の邊では、螢を絲に繋いで、婦人の胸飾

Bacon

又は頭飾としてゐる。この邊の螢は一吋餘もある大きなもので、其の光の強く美しい事は丁度夜光の珠の様だといふ事である。
また^{*}ベーコンといふ學者の書いた古い博物書に、むかし英吉利の片田舎の村では、子供が螢を捕つて、透きとほる瓶に入れて川の中に沈め、その光をあてに寄つて來る魚類を捕へたといふ話が書いてある。
これは螢火を漁火に用ひた例で、わが國でも、魚が螢の火に引付けられたのを見た人がある事は、
螢火に飛びつく魚や水の音

France

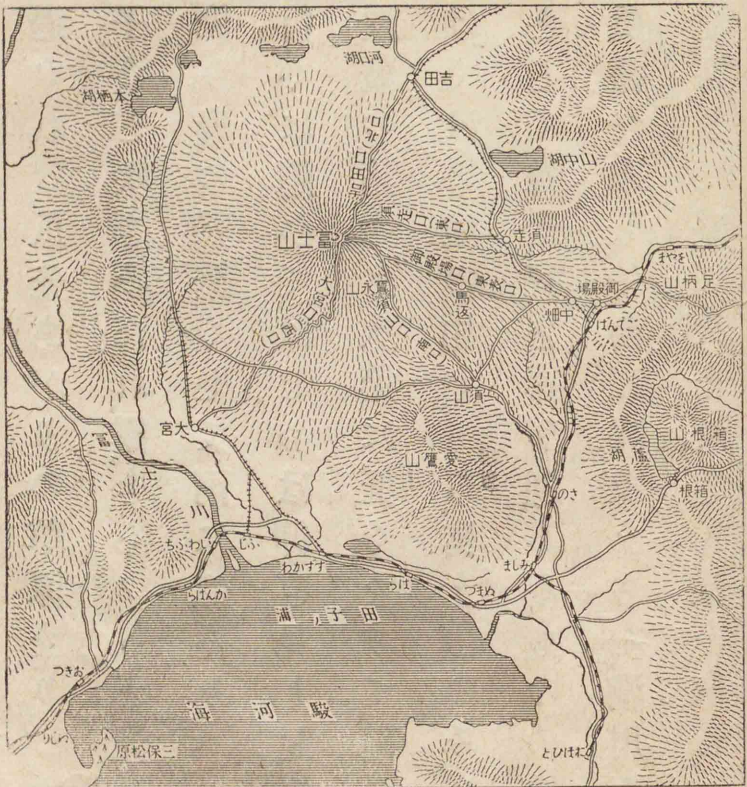
といふ句でわかる。
又ある畫家は、螢の畫をかくのくに、螢の光を使つたといひ、また近頃^{*}フランスのある學者は、螢の光で寫眞を撮つたともいひ、我が國でも、ある地方では養蠶の期節に、螢を多く集めて籠に入れて、蠶室に備へて置いて、夜間鼠の害を防ぐといふ。
斯様に螢の光を燈火の代りに用ひるといふ事は、昔から今まで世界到る處に行はれてゐて、珍しい事ではない。想ふに、燈火の發明のなかつた草昧未開の時代には、螢は随分廣く燈火の代用を務めたもので

あらう。(渡瀬庄三郎、螢の話)に據る)

一九 富士山 その一 金子元臣

御殿場 駿河國駿東郡に在り。
足柄山 相模國足柄上郡と駿河國駿東郡の境にあり。

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて、御殿場を發す。月はいま足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。その明かなること、恰も晝の如し。抑、富士山は、四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて、甲斐に屬せり。山の腰より



が登らんとするは中畑口なり。

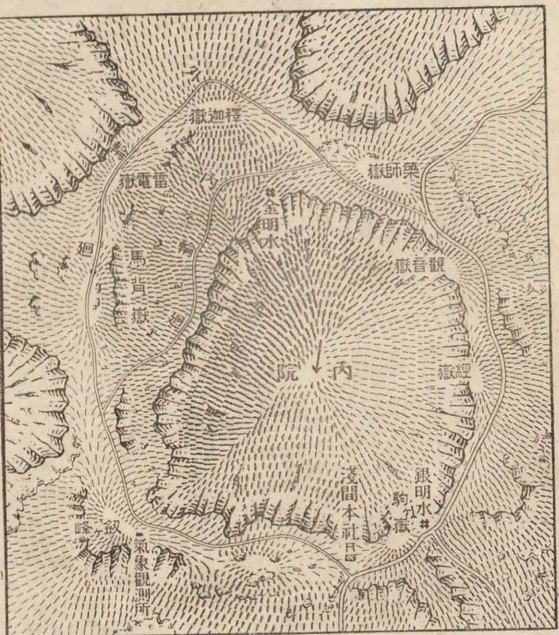
上までを、十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて長短定まらず。合の界に、石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今我

玉蜀黍や、芋の葉の影の長く、短くうつれる畑道を行
過ぐれば、爪先あがりの草原なり、山百合、女郎花、撫
子など咲きみだれ、露、きら／＼と光りて無数の玉を
飾り、蟲の聲繁くして雨に似たり。

行くに随ひて、はじめは仰ぎ見し足柄箱根の連山も、
愛鷹の諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く、堤の如く、
はては平地の如し。只、富士山のみ、夜霧の奥に、巍然
として聳え、我を喜び迎ふるものの如し。
風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に
立寄りて、盛に火を焚きて、暖を取る。

箱根
相模國足柄下
郡。
愛鷹
駿河國駿東
郡。

馬返までは、猶山の麓にて、いはゆる裾野なり。これ
より先は、路峻しければ、馬も利かずとて、この名あり。



木盡き、草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる焼

いつしか、樅、檜などの
林の間をゆく。月影、
梢を洩れて、鹿子斑の
雪かと疑はる。

太郎坊にて、金剛杖を
買ふ、白木にて長さ五
尺。こゝを出づれば、

石焼砂なり。生物の聲全く絶えて、只、わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山俗に草山三里、木山三里、禿山三里といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大概二三合目までなりと聞く。

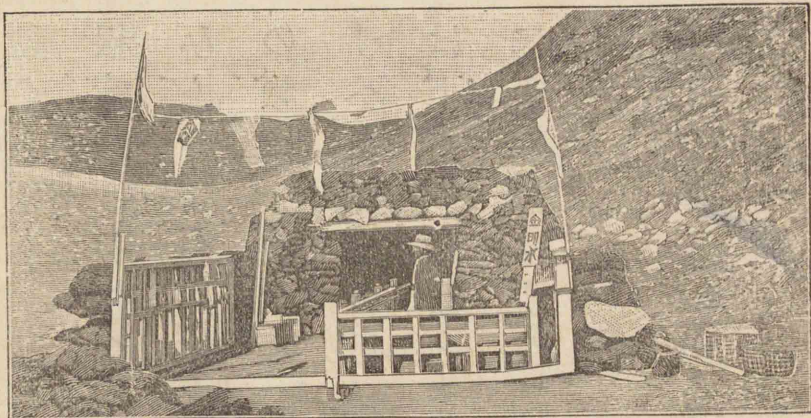
一合目に到れる頃、夜は頂上より明けをめて、次第に麓の方に及べり。折々、眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて、須山口の路と合す。寶永山は、六合目の左に欹ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち、白鷺の點々として、下方遙かに

寶永山
寶永四年十一月噴出す。高さ二七〇〇米突。

動くを見る。近づけば皆白衣の富士道者なり。「六根清淨」と唱へつゝ、步調緩やかに上りゆく。山に酔ひたるならん、途にうち倒れて苦しめるを、同行の人の頻に介抱するも見ゆ。

すべて、六七合目以上は、空氣稀薄なれば、人の呼吸數は、下界の二倍となり、火氣もまた弱くして、飯を焚くによく熟せず。糯米を加へて纔かに粘力を添ふとぞ。

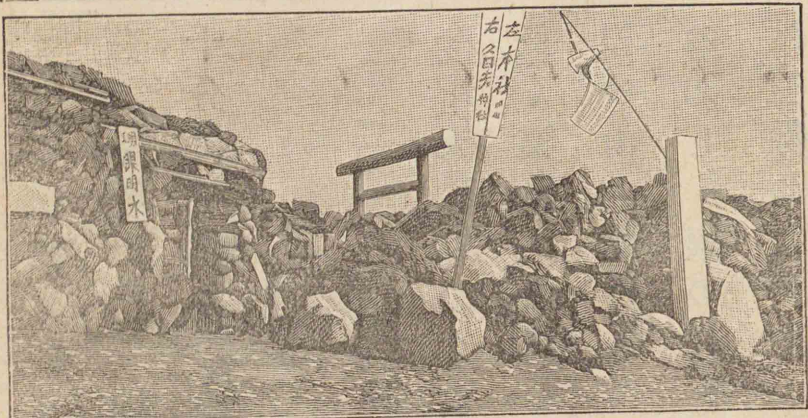
頂上を仰げば、山は殆ど落ちかゝらんばかりに聳え立ちて、一步は一步より峻し。谷めきたる凹みに雪



金 明 水

あり。潔うして、碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して、掘りて之を嚙む。齒牙に徹りて、つめたし。八合目よりはいはゆる胸突八丁にて、岩石の間に、路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に、梯子二つかかれり。午後一時、遂に頂上に

八峰
劍峰・馬背嶽・
雷電嶽・釋迦
嶽・藥師嶽・觀
音嶽・經嶽・駒
嶽。



銀 明 水

達す。頂上には、八峯環りて立てり。劍が峯最も高し。こゝに氣象觀測所あり。八峯の中間には、周回十五六町もあらんと思はるゝ、一大噴火口の迹あり。昔はこゝに水ありて、池を成しきとか。噴火口の外部を巡るを、御鉢めぐりと稱す。その途中北に金明水南に銀明水の二泉

ありて、盛夏も涸るゝことなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地に手をあてて試みるに熱し。三十分にて、鶏卵を蒸し、酒を爛すべし。

二〇 富士山 その二

今や、天に近づくこと一萬三千尺、杖を岩頭に立てて長く嘯けば、風起つて雲の飛ぶこと頻なり。足柄箱根の山々は、蟻蛭の如く山中、河口、本栖の諸湖は、杯水の如し。銀の針と見るは、富士川か、青き絲とみゆるは、三保の松原か。駿河の海、相模の灘は、二つの鏡を

山中・河口
甲斐國都留郡
本栖
同國西八代郡
富士川

日本三急流の
一。富士山の
西を流る。
三保の松原
駿河國安倍郡。

竝べたるが如くに光り、末は、天と一つになれり。試みに、掌を開いて掩へば、山も水も皆わが手中に藏る。忽ちわが對へる空中に、富士山の影現れたり。裾は山に互り水を越えて數州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮明なること喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西へ、夕日には東へ、その影現る。
*木花開耶姫を祀れる、淺間の本社を拜す。神官に乞ひて、杖には烙印、扇子、葉書などには朱印を捺す。薄暮、社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて、石を疊みて造れり。

本花開耶姫
大山津見神の
御女にして、
瓊々杵尊の
妃。

廣さは二十疊もあるべし。疎き板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を著、蒲團二三枚重ねて寝ねたるが、寒氣強くして目も合はず。未明に起きて戶外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひすてたる水は片端より氷りて、つらゝとなれり。乃ち立戻りて蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は清く晴れたれども、脚下は薄黒き雲の波、一面にはびこれり。その雲、綿の如し。見る見る、東の方、ばつと赤くなりしが、臆て紫となり、薄紅となり、遂に深

紅色となる。さて、瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽ちにして、百千筋の金光、きら／＼として、八方に散じ、天地、全く明かなり。降路は須走口を取れり。六合目より太郎坊までの間、砂の上を滑走して下るを砂走りと稱す。一度躍れば、杖も足も、止るところを知らず。只、風の耳朶に觸るゝ聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて須走に著きたるは二十五日の午前九時なり。登るには十餘時間を費ししもの、降るには僅かに二三時間、快なること甚だし。

裾野の月、頂上の日出御影、これを富士山の三大壯觀とす。我は今一舉してこれを併せ見ることが得たり。山神の我を愛してこの稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

二一 笑話五則

和田垣謙三

一 テールス

Thales

希臘の哲學者テールス、或時歩きながら一心不亂に天文を窺つて居た所、誤つて真逆様に溝の中へ落込んだ。通り掛りの婆さんこの爲體を見て、天文の御

研究は至極結構だが、天上の人ならばいざ知らず、地上に住居して居給ふ以上は、足元の御用心が肝心でござらう。」

流石の大哲學者も之に對しては一言も無かつたさうだが、この先生天文の觀察に依つて非常な金儲をしたと云ふ話がある。彼は元來學問にのみ没頭して、貨殖の計には一向心を留めなかつた故、常に赤貧洗ふが如く、村人は彼を嘲つて素寒貧テールスと稱した。テールス之を不快に思ひ、何とか報復の手段もがなと考へて居た。或日天文を観ると慥かに翌

年は油菜の豊年だ。そこで彼は諸處方々を歩き廻つて壓搾機を悉く借入れてしまつた。翌年になると果して油菜が非常な豊作であつて、彼方でも此方でも油を搾らうとしたが、壓搾機は皆テールスの一手占有に歸して居る。彼は之を非常に高く貸して、忽ちにして莫大の金を儲けた。テールス先生得意満面、口惡どもの油を搾つてやつた。」

二 ラフォンテーンの機智

寓話作者ラフォンテーンは、毎朝食事後、果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の

La Fontaine

Mantelpiece

の
燵
棚

梨をマントルピースの上へ載せて置いて一寸書齋へ行つた。其の中に一人の友人が來訪したので其の室へ通した。彼が書齋から出て其の室に來て見ると件の梨が見えぬ。「おや誰か梨を食べたのかしら。」友人は何食はぬ顔で「僕ではないよ。」君でなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨へ亞砒酸を入れて置いたのだ。」友人は驚いて「そりや大變だ。解毒劑は無いか。」「安心し給へ。今のは梨泥棒を見出す爲の策略なんだ。」

三 第一の理由

Wiesbaden
有名な
る温泉
場。

獨逸ウイースバーデンの或旅館の喫煙室で、毎夜夕食後、多數の浴客打集ひ、活氣横溢、談論風發、煙草の煙と共に互に氣焰の吐競べをした。或晩室の一隅に政體論が持上つて、一人の共和主義論者が燃ゆるが如き熱辯を揮つて、共和政の效能を説いた。座に一人の容貌魁偉なる白鬚の紳士があつたが、無言で之を傾聽し、時々「やく」と笑つて居た。共和主義者は之を見て、老人に對して云へるやう、「貴下は予と意見を異にせらるゝのであらう。貴下は恐らく王政論者であらう。」老人答へて曰く、「然り。」果して然ら

ば其の理由を承りたい。」と共和主義者は肉薄した。老紳士答へて曰く、「それには幾多の倔強なる理由があるが、先づ第一の、而して最大なる理由は、拙者が瑞典王であると云ふことである。」

四 回教僧と信徒

回教僧某、説教壇の上より聽衆に向ひ、「信徒諸君は予が今何を語らんとするかを知れりや。」聽衆異口同音に、「否我等の知る所に非ず。」僧、「そんな愚鈍なる者に向つて説教するは無益なり。」即ち散會を命じ、自分はずたゝ歸つて了つた。次の日彼は又同じ問

を繰返した。この度は聽衆、之を知れり。」と答へた。僧は「既に之を知れり。焉んぞ説くの要あらんや。」と、又もや壇を下つて行つて了つた。三度目には、信徒共今度こそは逃さぬ工夫をしようかと相談の結果、同じ間に對して、知る者もあり、知らざる者もあり。」と答へた。坊主拔からず、さらば知る者をして、知らざる者に説かしめよ。」又もやすたこら行つて了つた。

五 頓智で一命を拾ふ

或人其の奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪死に當る。覺悟せよ。」と云ふ嚴命を蒙つた。彼顔を地に擦

附けて、「どうぞ命だけは御助け下さるやう。」と嘆願に及んだ。「其は相ならぬ。併し死に方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたきか、即答せよ。」と。彼畏るゝ頭を舉げて、昔に變らぬ御慈悲有難く存じます。願はくは老病で死にたうございます。」王は失笑して遂に命を助けられた。(西遊スケッチ)

〇 二二 湘南雜筆

徳富蘆花

一

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

湘南
相模の海岸即ち逗子。鎌倉。大磯の邊を呼ぶ文學的の語。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を著けぬ。碧の衣すがくしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

二

今日初めて、鯛の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして、銀鈴を振れるが如し。

白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、花火を揚ぐる子供あり。

夏の季節は始りぬ。

三

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に残照流るゝ川あり、後に青蘆さやくと戦げり。潮次第に満ち、川逆まに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底地よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは、隊をなして、玉にも似たる水を遊げば、其の影ちらくくと底に印せり。石垣の穴より出て遊ぶだぼ鯨は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰻は杭を抱きて這

ひ登り、石垣に縋れる宿かりは身を投ぐる様にころころと水底に墜ち行く。
 下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ来る。潮満ち盛れば、夕陽明滅す亂流の中、殘照の影や、もすれば押流されむとし、小鮮群りて水を攪すれば、水流れて其の紋を消し、氾々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出てむとすれば、幾隊の魚苗も止りかねて流れ行く。
 垂れたる足の爪先に水とどく頃は、殘照消え、潮も満

ちて淀みぬ。 鱗跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる様なり。(自然と人生)

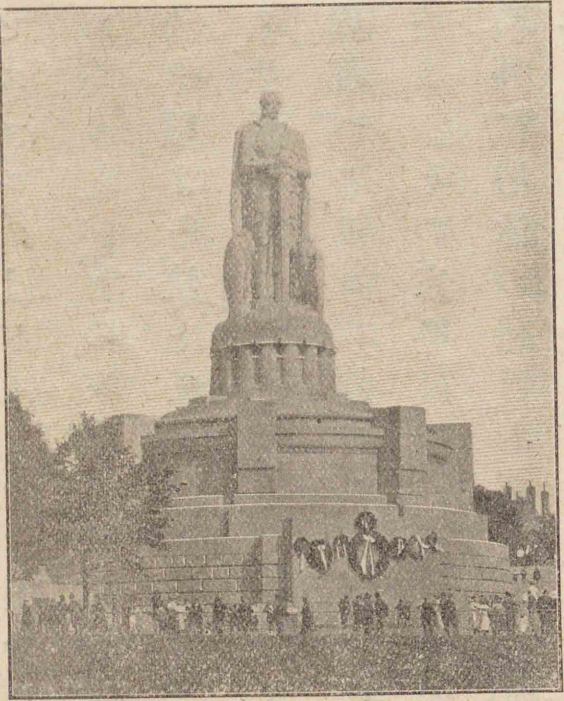
二三 ビスマルクの幼時その一 落合直文

世に、英雄と呼ばれ、豪傑と稱せらるゝ人々の言行は、往々にして常軌を脱し、まゝ常人の付り知り難きものあり。されば、世の人は、それら英雄豪傑の士の偉業を見る毎に、皆、これをもて、その人の天稟の才に歸して、深くその由る所をきはめず、かへつて吾人の到底企て及ぶべき所にあらずと思ひ諦むるが多し。

Bismarck

こはまことに思はざる事の甚だしきものといはざるべからず。蓋し英雄豪傑の士の、その才常人に越えたるは、その天稟に出でたる所もあるべけれど、かかる人々が、その志を達して、英名を世に轟すに至るまでには、皆幾多の辛酸を嘗め、幾多の勉強を積み、始めて然りしものにて、その苦心の迹、また頗る常人に過ぎたるものあるなり。これまことにわれらの心を留めて學ぶべき點なりとす。

ビスマルクの如きは、その最もよき一例なるべし。世の人は皆いへり、「かれの學校にありし間は、少しも



像石クルマスビ

讀書したることなく、ただ撃劍争闘のたぐひをのみ勵み、稍長ずるに及びては、乘馬に耽り、喫煙に淫したるに、その壯年に及びて漸く志を得、遂にドイツ帝國創立の偉勳を建てたるもの、これ皆風雲の會と、彼が天稟の偉才とに因れり」と。これまことにビスマルクを知らざ

片田舎
シユレスウイ
ヒ州のフリ
ドリヒ、スル
ウへと
いふ
地。

Berlin
Sparta

る者の言のみ。
ビスマルクは、ドイツの片田舎なる、貴族の家にうま
れたりしが、その家庭は、頗る嚴格にして、彼はいとけ
なき頃より、決して他の貴族の子弟のごとき悠長な
る生活を許されざりき。六歳に達せし時、母は彼を
國都ベルリンに送りて、某博士の家塾に入學せしめ
たり。その家塾は、スバルタ流の教育を重んじ、體操
の外に游泳の課目もありて、過激なるまでに體育を
行へり。塾生は毎朝六時に起き出で、七時には教場
に入らざるべからず。朝食はもとより、午餐、晚餐い

づれも粗末なる物のみなり。しかのみならず、我が
膳に供へられたる食物をあます時には、これを食ひ
盡すまでは、皿を捧げて卓前に立たざるべからずと
いふ制裁さへありき。

嚴格なる家庭に生長せりとは聞きしかど、素より貴
族の子にて、特に僅かに六歳の童なれば、塾長はビス
マルクの果して耐へ得るか否かを疑ひしが、彼は少
しも臆することなく、よく塾生の體面を保ちたり。

二四 ビスマルクの幼時 その二

いつしか夏となりぬ。游泳の始るべき時は來りぬ。塾生はこの新來の小童を苦しめんとして、樂しみてその日の來るを待てり。游泳所と定められたる河の兩岸には、塾生と教師と相並びて立てり。すべて新しき生徒は、一度教師より水中に投入られ、河の中には、又多くの塾生ありて、これを苦しめ、以て水に慣れしむるを例とせり。ビスマルクの、一たび河中に投ぜらるるや、深く水中にしづみて再びその影を示さざりしが、しばらくして彼は前岸近く現れ、悠然として岸に上れり。人々相顧みて詞なく、皆その大

膽なるに驚けりとか。これよりビスマルクの名塾中に高く、彼は遂に一方の首領として仰がるゝに至れり。

粗暴にして體力强きものは、多くは學業に拙きものなり。さるをビスマルクは、教場に入りても亦その聰慧なること、往々、儕輩を壓して教師を感歎せしめたり。ことに彼は世界歴史を好み、ギリシア・ローマの古英雄の傳記は、最もその愛讀せしものにして、消えかゝれる殘燈の下に、ひとり史書を繙いて様々の空想に耽り、得々として夜の更くるをも知らざりし

Greece
Rome

Bonner

こと、殆ど連夜なりきといふ。
 十七歳の時、ある中學に轉じて、こゝにて學士ボンネ
 ルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕に、その居
 を訪うて、深く歴史の研究に心を委ね、孜孜として少
 しも怠らず。平生の粗暴なるに似ず、書に對しては
 常に寢食を忘れてたり。思へばこれ誠に彼が一世の
 偉業を大成せし基にして、其の事に當りて裁決流る
 るが如く、奇策縱横にして、その用意の周到なる、自信
 の鞏固なる、皆これ歴史研究の賜なりといはざるべ
 からず。世に天稟の才といふこと無きにはあらね

Austria

オーストリアと戦端を開きしは西暦一八六六年六月なり。

ど、琢かざば玉も瓦礫に等しからん。ビスマルクが
 我を折り節を屈して讀書に勉めたりし一事は、われ
 らの深く鑑みるべきことにあらずや。
 後年彼が國政に任じ、遂にオーストリアと戦端を開
 きて、旬日の間に城下の盟をなさしめ、勳威赫々とし
 てベルリンに凱旋するや、舊師ボンネルは、當時ベル
 リン中學の校長なりしが、この報に接して、欣喜措く
 能はず、直ちにビスマルクを訪ひ、辭をあらためて、そ
 の偉勳を稱揚し、閣下よ、閣下は、嘗て愛讀せられたる
 世界歴史の中に、今日は、みづから壯快なる一節を記

入せられしにあらずや」といへば、ビスマルクは深くその舊恩を謝し、しづかに答へて、「否、先生の讚辭は我の當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究の實を擧ぐることを得たり」といへりとぞ。多年薰陶に従事せし舊師の喜は如何。また其の素志を遂げしビスマルクの愉快は如何。聞くわれらまで、心の動くを禁ずること能はざるなり。

二五 伯林落その一 河上肇

十四日 西曆一九二二年

*十四日の午後に知人が飛んで来て、「大使館の形勢が

(大正三年)八月 大使館 伯林駐在、日本大使館

Kaiser

一變して仕舞つた。皆に一刻も早く立退けと云つて居る。」と通知してくれた。一刻も早くとは何事であらうと、兎も角大使館へ行つて見る。館の門前では幸にしてカイゼルを見るの榮を得た。こちらには私と友人のT君と只二人立つて居ただけであるが、私等が脱帽して敬意を表すると、カイゼルは擧手の答禮をして、暫く私共の方に笑顔を見せて居られた。戦時だと云ふに自動車に乗つて飛歩いて居られる所も案外だが、其の顔が寫眞で見たより餘程愛嬌のあるのも案外であつた。今や乾坤一擲の大戦

を企てつゝある獨逸皇帝その人とは思はれぬ程平和な顔に見えた。

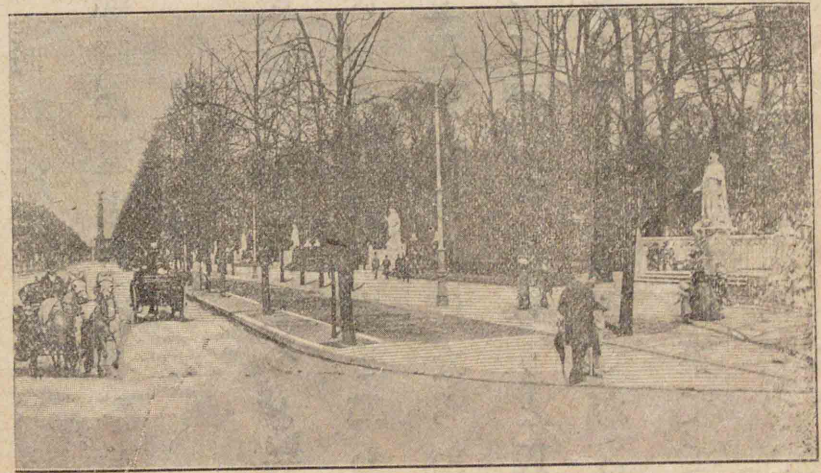
此の様子では、縦ひ日獨開戦となつても、仁慈の陛下まさか吾等平和の書生を殺し給ふ事もあるまいと云ふ様な氣がしたが、何は兎もあれ、急いで大使館の應接間に入つて見ると、そこに警告として一枚の張紙がある。「今後送金の見込斷然無之に付、此の際一刻も早く歸朝をされ度云々」と書いて、一刻も早くには圈點まで打つてある。話を聞くと日獨開戦の危機が既に迫つて居て、愚圖々々して居ると生命の

危険もあり兼ねまじき様子。何れにしても金がなくては致方がないから、私も即時に退去の決心をして、重ねて旅費を貸して貰ふ。

今朝までは居残ると言つて居た者が急に立つと云出したので、宿の人々も大きに驚き、頻に理由を尋ねるけれども、何故一刻も早く立退かなければならぬのか、只、日獨開戦の危機が迫つて居るのだらうと思ふだけで、實は當人にも一向事情は分らぬのである。豫てより、まさかの場合には一切の荷物は打棄てて、只身を以て免れる覺悟では居たものの、明朝立つこ

とにすれば、まだ餘裕もあるので、夜に入つてから荷物の整理を始める。洗濯物も何も、皆無茶苦茶に詰込んだのだが、それでも夜明の三時半まで掛つた。大使館で荷物を預ると云ふことだつたが、何れにしても戦争の續く限り、再び手に入る見込は無いのだ

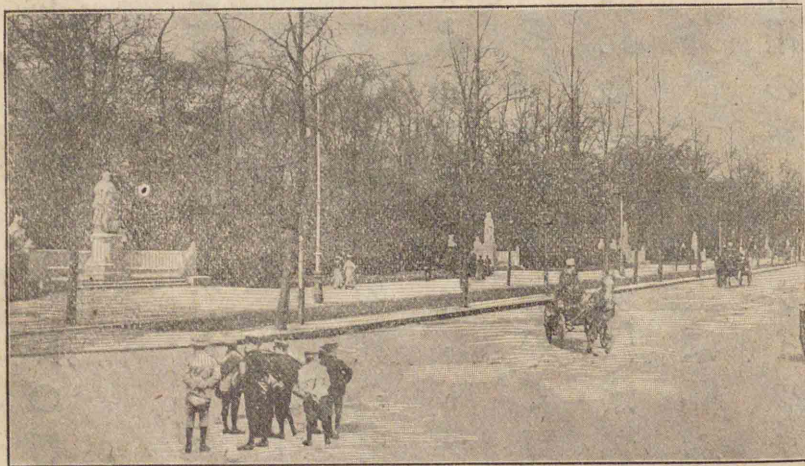
伯 林 の



Dresden

から、私は其のまゝ宿へ預ける事にした。やつと一睡した後、勿々朝の珈琲を濟して、先づ近所の銀行に僅かばかりのほした金を引出しに行く、それから汽車の切符を買ひに行く、更にドレスデン銀行に行つて、獨逸の札を和蘭の札に換へる。停車場

凱 旋 道 路



Suit case

Sandwich

でも銀行でも、吾々の行く所には必ず十名近くの日
 本人がある。皆慌て、逃出す連中なのである。
 匆々の中に日は暮れて、臆て發車の時刻となる。途
 中の停車場には赤帽が居らぬから、成るべく荷物を
 軽くしてとの注意があつたので、殊に弱虫の私の事
 だから、寢巻と着換のシャツを入れた小さなス＊ーツ
 ケースを持つたきりて宿を出る。まだ暑いので夏
 服は着たものの、倫敦に逃げて此の冬を越すには必
 要な品と思つたから、極寒用の外套を其の上に纏ふ。
 外套の右のポケットには辨當用のサ＊ンドウイッチ

Auf Wiedersehen

「また御目
 にかゝりま
 せう」の
 意。

がはみ出してゐる、左のポケットには宿の人が氣を
 きかしてくれた葡萄酒の瓶が潜んで居る。時正に
 夜の十時半、自動車に乗つて、二箇月あまり住み慣れ
 た家を見棄てる。再會は期し難けれども、ア＊ウフヴ
 イデルゼーエンと挨拶しながら、帽子を振りつゝ出
 立すれば、家の人々露臺に出で、ハンカチーフを振り
 つゝ、日本語で、「左様なら」と云ふ。

二六 伯林落その二

停車場に着いて見ると、乗客の大半は日本人である。

見知らぬ獨逸人までが吾等を捉へて、何故歸るのか。歸朝の命令を受けたのか。なぞと頻に質問を發する。一昨十三日の夜は僅かに二人の日本人しか立たなかつたのに、昨十四日は百餘人立ち、今日も亦百人近く立つのだから、不思議に思ふも無理はない。汽車は二等の切符を買つたが、態と四等に乗込む。昨日立つた邦人の一行は、發車間際に軍人の爲に席を譲らせられて、己むを得ず四等に乗つたと云ふ噂があつたからである。

非常に疲れては居るが、神經が馬鹿に興奮して居る。

纔かに半時間も睡つたかと思ふと、すぐに眼が覺めて一向に眠れない。其の中に夜が明けて、十六日と爲る。汽車ののろいこと夥しい。老練な運轉手は兵に徴せられて、素人が車を動かして居るせいか、停車及び發車の度毎に列車は驚くべき震動をする。棚に上げてある荷物が振落されて、思ひ掛なき怪我をした人もある。

軍隊輸送の際使用したと思はれる假小舎と白木の卓子とが、所々の停車場にあるのが眼に着くばかり、外は茫々たる平野で眼を慰むべき山河の眺としては

Löhne
lemorade

絶無である。携へ來つた辨當も今朝程食つて仕舞ひ、ポケットに潜ませた葡萄酒も夙に傾け盡したが、飲食物の賣子は更に來ない。腹の減つたのよりも喉の乾くのが辛い。午後の四時^{*}レーネで乗換のため、汽車を下りる。始めてレ^{*}モネードを飲み、辨當を買込む。發車は五時四十何分だと云ふ。一時間四十分ばかりは茲で待たねばならぬのである。待つて居る中に軍人を満載した列車が西に走る。兵卒等は家畜車の中にまで押込められて、牛の頭の見ゆべき所に顔を竝べて、外を覗いて居る。午後六時

Rheine

Salzbergen

近くにレーネを出て、夜の十一時にライネといふ所に着く。既に國境に近き所だといふ説である。どうせ今夜も眠られないから、いつそのこと好きな珈琲をといふので、その待合室へ入つて二杯傾ける。之が恐らく獨逸から送る最後の葉書であらうと云ふやうな事を、例に依つて獨逸文に認めながら、故郷の父母妻子に送る。

十二時十分にライネを出發すると、一時前に汽車はまたザルツベルゲンといふ所に停る。愈、此處で國境の検査があるのかとおもふとさうでは無い。國

境までの汽車は夜が明けてから更に出るのだと云ふ事である。小さな驛なので十分に腰を掛くべき場所もない。幸に出発すべき列車は既に構内に來て居るので、私は同僚のT君と共に四等の列車にスツケースを持ちこんで、珍しき此の一夜を語り明かす。經費節減の爲でもあるか、構内の電燈も過半は消されて仕舞つた。列車の中は固より眞暗である。誰が云出したともなく、日本からの最後通牒は十七日に送る筈だと云ふ説が傳はる。數へて見ると今日は既に十七日である。最後の通牒を送つた

Bentheim

が最後、獨逸の事だから何をするか分らぬ。早く國境外に出して呉れば宜いのに、寒い一夜を國境近くに止められて、影薄き月の光に、吸ひ飽いた煙草を猶も吹かしつゝ、夜の明くるを待つ中に思ひは遙かに故郷に馳せて、十年前歸省後東上の際汽車中で見た宮島沖の月のことなどを思ひ出した。五時三十三分發車間もなく、ベントハイムといふ所に停車する。時計を見れば正に六時、此處に國境の検査があるのだと云ふ。國境の検査に就いては、伯林で様々の噂があつた。

英國の銀行券を持つて居る者は、靴下の底へ敷けと云ふ説さへあつた。日本字で書いたものなぞは、一切嚴禁だと云ふ説もあつた。手紙さへ獨逸文で開封でなければ許さぬ位だから、生きた人間を出すとなれば、相應に嚴重な検査があるに違ひないと、私も最初から思ひ定めて居た。汽車中でも色々な説があつたので、折角様々の事を書き集めて居た手帳も文字のある所は引裂いて棄てて仕舞つた。それほどまでに警戒してやつて來たが、來て見れば案ずるほどの事もなく、私なぞは鞆も開けぬ中に、検査済と

いふ紙片を貼つて貰つた。先づ之で無事に免れ出た譯である。因つて他日の記念の爲、検査済の紙片の上に、大正三年八月十七日獨蘭國境を通過すと記入する。(祖國を顧みて)

二七 智慧伊豆守

大町 桂月

智慧伊豆守とは松平伊豆守信綱の事なり。その伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど、老中となりたればとて、特に智

島原の亂
肥前ノ耶蘇教
徒 島原城を
襲ひたる亂。
寛永五年二月
平定。

將軍
三代將軍徳川
家光。

慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原の
亂を平げたり。されど、島原の亂を平げたればとて、
特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。さらば智
慧伊豆守の名は何によりて得たるか。
或時將軍鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際將
軍之を味はれんとす。急の事とて老中ども雲雀を
金串に刺して焼くに、火強く、手先熱して堪へられず、
急げば急ぐほど早く焼けず、大いに困り居たり。伊
豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それを金串
に刺して焼くに、火熱手に及ばず、やすくと焼くを

和田倉橋
今の宮城正門
前御苑の東北
にありて、内
濠に架したる
橋。

得たり。而も最も後に焼き始めし伊豆守が最も早
く焼き終へたり。他の老中ども舌をまき、平日の勤
はとて伊豆守に及ばず。斯様なる假初の事だに
も仕負けたり。とて笑ひたりといふ。是、一場の頓智
なり。されど、これを以て智慧伊豆守の智慧を證明
すべきには非ざるなり。
或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊にて
堀の水鳥を逐立たせよと命ず。然るに何處を見て
も小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣りをるを
見て之を買取り、石の代りにして之を投げ、水鳥を追

八重洲河岸
丸の内、大手
外郭の南、内
濠の沿岸なる
一郭。

立てたり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き忽ち取除くは無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出来たり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。以上の如き逸話は一々枚擧するに違あらず。少年

二代將軍
徳川秀忠。

時代の雀取りの失策は有名なる話なれば、誰も聞知りたらん。二代將軍が「以て大事を託するに足る」と感ぜられしも宜なりけり。この一事は以て伊豆守の人となりを知るべし。己は八裂にせらるるとも主君の過失を言はず、世にも頼しき人なるかな。智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心掛の如何にも由るなり。請ふ伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「是、我一人の力にあらず。何人の智も、もと格別の差なきものな

實父
大河内久綱。
養父
松平正綱。

り。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。とて足を見せたり。その足の甲に畏りだこ四つ五つあり。足の甲にたこあるは正坐謹聽に慣れたればなり。伊豆守曰く、我が實父も養父も家康公秀忠に公に召使はれて御才覺と御家法とを能く存じたり。我は幼少の頃より正坐して實父養父の教を謹聽せり。秀忠公家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寝して段々承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出来たり、心には才覺が出来たりと。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今

四代將軍
徳川家綱。

の世の青年多く放縱我執に陥れり。大成せざるも宜なるかな。若し大成せんと思はば、伊豆守の足だこに就いて反省せざるべけんや。伊豆守の臨終は殊によく智慧伊豆守の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させて、之を新しき藥研に入れて焼かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を焼きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる秘密の事もあるべし。されど多くは

伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらばゆゝしき事なり。故に一切之を焼きたり。我が身の死すると共に我と我が功を自ら没したり。嗚呼、是、智慧伊豆守が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆守の智慧伊豆守たる所以なり。(すゞりの水)

二八 心の修行

村井 寛

伏見天皇
九十二代

伏見^{*}天皇の御代に、日本全國から、刀工十八人を選び出して、各一振づつの刀を徴されたことがあつた。

その中で、第一の選に當つた刀が、天皇の御守になるといふのだから、諸國の名工は、みな畢生の腕を揮つて、その刀を鍛へあげた。

當時、日本一の刀鍛冶と、人も許し、自らも誇つて居たのは、越中の國松倉^{*}の人、郷義弘^{*}である。義弘は、當時刀打つ業では、恐らく自分の右に出づるものはあるまい、自分こそ必ず第一の選に預るに相違ないと待構へて居たところ、思の外に、相州の正宗^{*}が第一といふことに定められた。義弘、これを聞いて、かれ正宗は、刀を打つよりも、世あたりの方が上手で、賄でもつ

松倉

下新川郡松倉村。魚津港の南二里。
郷義弘
右馬允と稱す。

正宗
相模國鎌倉町雪の下に住す。

かつて、この僥倖を得たのであらう。よし、それならばこれから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で越中の國からはるばる相州鎌倉へ出かけて往つた。

義弘は正宗の家に著くと、丁度仕事場には槌の音が聞えたので、まづその窓から中の様子を覗つて居たが、たちまち何を悟つたか、今までの勢何處へやら、しほしほとして玄關に行き、刺を通じて正宗に面會を求めた。

正宗は、有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義

弘は初對面の挨拶を懇慫に述べて、さて正宗殿。何を隠さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、様子によつたら貴殿を討果す覺悟で参つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばないことを悟りましたから、懺悔の爲に御話し申す。一體自分は酒ずきで、仕事場に酒を置くことがあり、暑い時には兩肌脱いで刀を打つこともあります。今貴殿の刀を打たれるさまを見ると、わが身のはしたない心掛とは雲泥の相違、仕事場には、かうがうしく注連繩を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折

目正しい袴をつけて、威儀堂々と槌を取られる。その眼はすこしも外を視ず、その心はすこしも外に散らず、身も魂も其の刀に乗移るかと思ふばかり。それほどの丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られることと感じ入りました。今まで、腕一つで刀打つものと心得て居たのは愧しい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇に頼んだ。正宗は謙遜して一旦斷つたけれども、義弘の熱心已み難いを見て、遂に弟子にしたといふことである。

Penguin

二九 ペンギン

杉村廣太郎

凡そ天下に、ペンギンほど人を馬鹿にしたものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には黒、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼と言つても短いから、是で飛ぶ譯には行かぬ。唯時々之をふたくくと上下に叩いて、一つには身體の調子を取り、一つには敵と戦ふ時の武器に使ふ。見たところは、さながら小作りな人が、

黒の燕尾服に白のチョッキ白のツボンで、両手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは、丁度襟の處に黒い線があるので、まるで黒のネクタイを締めたやうにも見える。人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。

春先南極圏へ移つて來て、然るべき處へ、めい／＼巢を作つて了へば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。其の出かける時は、一人の總指揮官が有つて、一同は其の命に従つて連

立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其のあひだに何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘りはなほだしい喧嘩はしない。中には近所に親を失つた身をし子鳥が、心細げに巢に残されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話を焼くといふやうな、義侠心に富んだ奴もある。

又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが、一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが例

Nordenskjöld

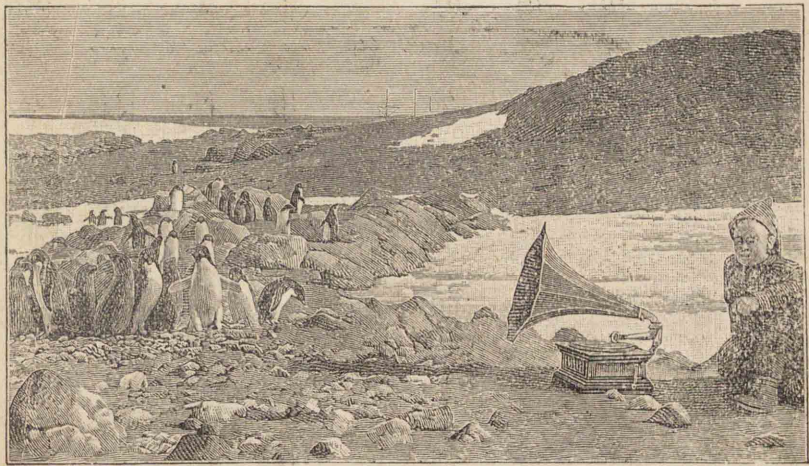
の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善悪ともに人間に似たところがあまり多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた。」と探検家ノルデンシヨルドも言つてゐる。

ペンギンの種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて、飛ぶことの出来ぬ者が、どうして海を隔てた北の方から渡つて来るかといふと、是は泳いで来るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の

Shackleton

釣合を取るにとどまる。泳ぐに脚を使はぬ事は、或人が兩脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行つたといふのでも知れる。水では泳ぐが陸では歩く。所で敵に追ひかけられたとか何とかで、大急ぎに驅出さうといふときは、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で櫓の様に氷の上を滑り走る。其の早いことは到底人間業では追ひつけぬ位である。

ペンギンの音楽を好むのは有名な話で、シヤツクルトンの探検隊が、南極に止つてゐた時、一行中の滑稽



極地の慰

家マーヌトンが時々蓄音機を氷の上に持出してやつて見せた。するとペンギンが十羽二十羽とおひくゝに集つて来て、遠卷に之を取圍んで、感心して聞いてゐたといふ。何分氷雪の外に見るもののない處とて、よくよ

く無聊に苦しむものと見えて、何か變つたことがあるとペンギンども随分遠方まで見に来る。大勢で来る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。シャツクルトンの一行が、自動車を動かしたり冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさに熱心に見に来たといふ。大勢づれのペンギンが、途中人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一

行中の雄が一羽出て来て、恭しく首を下げる。や、伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には、唯カカカガアガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて首を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか。」と言ふ風だ。

元より以てお分りになるべき筈のものではない。人間は「ぼかんとして立つたまゝだ。」こゝに於てペンギンは、此奴分らぬわいと見て取つて、今一度前の

挨拶を長々とくりかへす。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやく言つて承知しない。其處で前に挨拶に出た男は大きに面目を失つて引下る。すると今度は、代り合ひまして代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て来て、又前と同じカカカガアガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も面白半分我慢して聞いてやるが、是が犬でもあつたらそれこそ騒だ。シャツクルトンの探検記の中にある話だが、或時ペンギンども、右の順序で犬に挨拶をしたが、元

より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカカカガアガアをやり出した。犬は面喰つて、わん／＼と吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。これを見てゐた人間は、孰れも腹を抱へざるはなかつたといふ。最後に斷つて、おくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは南極圈内、及び其の附近である。北極のオークといふのが、是に似てゐるとして、一に之を「北極のペンギン」と稱へることがあるが、是はまるで種類が違つてゐる。(へちまのかは)

Ank

三〇 月夜の高坊主

北條 團水

むかし京に味噌屋仁兵衛といふ者、二條邊に師を取りて毎夜謠の稽古に通ひけり。ある夜常よりは更けゆく空に連れだつ友もなく歸り、門戸をあわただしく叩きければ、内より驚き明けけるに、仁兵衛は人心なく、氣つけを飲まされ漸う生返りて、われ歸るさ月夜ながら薄曇り物凄きに、堀川の辻にて背高き坊主後よりおひかゝりし故、息をきつて逃げければ、急に追つかけ來りしが、此の門口にて見失ひ、それ故か

かる仕合」といひければ、聞く人皆驚き、それこそ見越入道よ。」と舌を振はしけり。

この一物、昔より高坊主とて、野原墓原四辻橋のほとりより必ず出づるといひならはせり。これ愚なる人に臆病風吹きそひて、すごく歩く夜道の月影に、氣の前より生ずる所の影法師なり。その子細は此のもの前よりも來らず、脇よりも見えず、後より見越して、月夜にかぎりて闇には現れず、後よりさす影法師なれば、坊主のごとく影のうつるなり。仁兵衛おびえたる取沙汰その頃隠れなく、げにも味噌屋のし

るしなりと秀句を申しあへり。

或夜此の仁兵衛の甥深草より來りしに、あわただしく扉を叩く。仁兵衛何事ぞとくぐりを開けけるに、甥の仁助片息になつて申すやう、寺町の辻より見越入道追つかけしゆゑ、これまでは逃げ來れり、助け給はれ。」と涙を流す。仁兵衛打笑ひ、我も此の頃臆病からさやうのうるたへたる事をいひて、近所の衆になぶられたるに、又そなたまで外聞悪し。それはいづれ形のない月の影法師なり。まづ内へ這入れ。」といへば、「いや、後から帯を捕へて只今引きずつてま

ゐる。」といふに、内より手を取つて引入るれども少しも這入らず、「手が抜ける。」とわめく。手を放せば、外から引きずる。」といふ。

仁兵衛もあきれて、「おれが絶入したをいづれも今合點がゆくべし。月の影にこのやうに手足がついて強力なるものか、何とぞ外へ出て、その入道めを仕様はないか、樞戸が狭いによつて内からは出られず。おれを笑うた衆へ見せしめのため、兩隣を裏から頼め。」とわめく。聲高なるに驚き、西隣の八右衛門、東隣の七兵衛、何事ぞと出て合ひ、樞戸から音づれば、

「その帶をとらへて居る入道めがいづれもの眼にはかゝらぬか。」とわめく。いかな事、鼠一疋あらばこそ。仁兵衛が味噌たく大釜に合ひたる大杓子のあつらへを、仁助背中にさして來りしが、東山より出し月影に又高坊主と見えしを、首の細きこと絲の如し。」と、甥が念を入れていふ程をかしく、帶にさしたる杓子の樞戸につかへて這入らぬを、後から引くと思ひし甥も、流石に仁兵衛が甥なりとて又これ沙汰。(一夜船)

三一 野寺の鐘

佐々木信綱

野寺の鐘(カ)に送られて

夕日は森に沈みゆく

名残の雲のくれなるも

見るく薄くうすれゆく

鶏鳥屋の中に入り

里の子家に歸りたり

竹村がくれ夕餉たく

煙ぞ靡くこゝかしこ

静けき村の夕暮や

安けき村のゆふぐれや

よそめいぶせき伏屋にも

楽しき聲のみちくゝて

三二 東郷大將

世界の海戦史上最も赫々たる名聲を博(カ)するものは
英國の水師提督ネルソンなり。彼はトラファルガ
ルの一戦に於て佛國の艦隊を全滅せしめ、當時猖獗
を極めたるナポレオンの猛威を挫けり。今之を、日

Napoleon Nelson
Trafalgar

本海上僅かに三十時間の戦闘を以て、敵が過ぐる九箇月間慘澹たる苦心を重ねて東航せる三十八隻の大艦隊を全滅せしめたる、我が東郷大將の偉功に比す、其の世界歴史に光彩を寄與するもの、正に伯仲の間にあると云ふべし。宜なるかな世人東郷大將を呼んで東洋のネルソンと稱する事や。

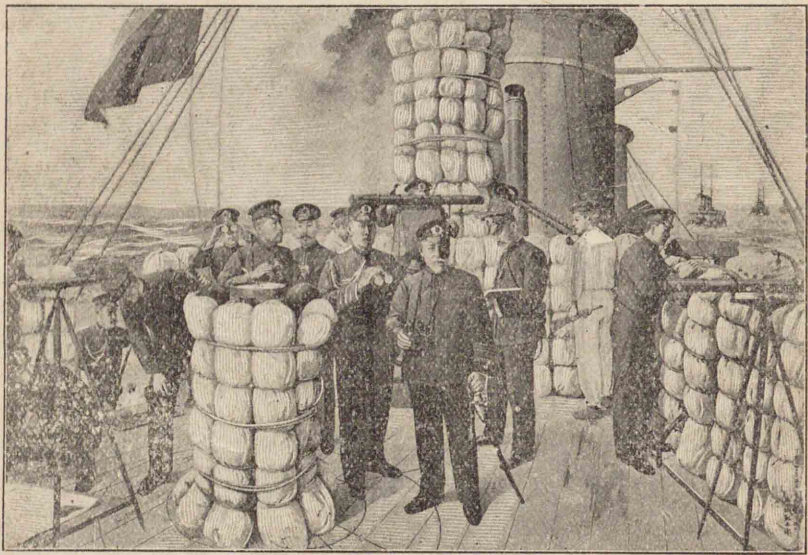
日本海海戦の壯觀は、普く世の知悉せるところ、茲に之を贅するを須ひず。余は今此の大戦の側面觀ともいふべき、大將の逸事を記して、戦勝の偶然にあらざりしを明かにせんと欲す。

加藤參謀長
當時少將、名
は友三郎。
秋山參謀
當時中佐、名
は眞之。

震天動地の大海戦今や開始せられんとする時、大將は旗艦三笠の司令塔に在りしが、其の胸中作戦の計畫すでに成りて、おもむろに艦橋の上を歩めり。其の沈着なる態度、大戦の將に至らんとするを知らざるものの如し。加藤參謀長、秋山參謀、大將の危険を憂へて、千金の御身なりかゝる危険を冒し給ふべきにあらず、冀はくは司令塔中に入り給へ。と云ふに、大將は疎鬚を捻しつゝ、莞爾として、好意は謝す。然れども予すでに年老ゆ。今や餘命を君國に捧ぐべき時機到來せり。卿等年なほ壯、我が海軍の將來は卿

等に待つところ多かるべし。卿等幸に自重せよ。」と。二氏は此の情厚き言葉にいたく感激せしが、なほ重ねて、閣下の御一身はわが海軍の消長に關するや頗る大なり。ゆめ御身を輕んぜさせ給ふべきにあらず。とく司令塔に入らせ給へ。これ君國の爲なり。願はくは疾く。」

と、切に其の安きに就かれん事を乞ひしが、大將は却つて之を怡ばずして、一步もこの艦橋を退かじの決心を示されぬ。かくて大海戦はいよく開始せられぬ。砲聲殷々、



三 笠 艦 上 の 東 郷 大 將

硝煙漠々たるただ中に、大將は望遠鏡を手にしたるまゝ、身動きもせず、ただをりをり微笑して快哉を呼ぶのみ。彼我的打出す砲彈恰も急雨の亂下するが如く、面を向くべくもあらざる中に、大將は從容として立てり。そぞろに膽甕

相模太郎
北條時宗

の如き相模太郎の風姿を想ひ浮べしむ。
とかくする中に敵彈飛來り、大將の立てる艦橋の下
に爆發して、破片其の身邊を掠めぬ。而も大將は不
動山のごとく、いさゝかも驚ける氣色なく、從容とし
て望遠鏡を手にせるまゝ、仔細に戰狀を觀望せり。
伊地知艦長は、敵彈大將の脚下に碎けしを見て、大い
に驚き倉皇其の傍に走りゆきしに、大將は平然とし
て、そのあわたゞしさは何事ぞと言はまほしげに莞
爾として面を向けぬ。
この光景を目撃して、味方の士氣はいよく振ひぬ。

伊地知艦長
當時の三笠艦
長大佐伊地知
彦次郎

忠誠

東郷大將筆蹟

東郷大將筆蹟
皆口々に、大將は神にして人にあらず。露艦の撃ち
出す彈丸大將の脚下に平伏せるぞ可笑しき。と、大笑
しつゝ、砲
撃をつい
けぬ。幾
何もなく
して敵艦
大破し、多

くは戰鬥力を失ひて全滅に歸したり。斯くのごと
くにして未曾有の大勝は我が軍の手に收められぬ。

沈勇東郷大將の如きは、蓋し稀に見るの偉人と云ふべし。嗚呼日本海海戦の偉業や、此の人にして初めて成し得たるもの、皇國の興廢この一舉に在るの秋、天この偉人を降下して、我が國土を幸せるにあらざるなきか。

大正國語讀本 卷一終

大正五年九月廿五日印刷
 大正五年九月廿八日發行
 大正五年十二月廿二日訂正印刷
 大正五年十二月廿五日訂正發行

大正國語讀本 全拾冊

卷一・二	各金三拾四錢
卷三・四	各金三拾二錢
卷五至卷十	各金三拾錢
大正七年度臨時定價	各金三拾九錢
自卷五至卷十	各金三拾七錢
自卷五至卷十	各金三拾五錢

著者

保科 孝一

發行者

會社 育英書院

印刷者

目 黑 甚 七

株式會社 秀英舍



發行所 發賣所

東京市牛込區白銀町二十番地
 振替口座(東京)七四二番
 東京市京橋區南傳馬町二丁目
 振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院
 目 黑 書 店

東京市麴町區土手三番町三十六番地
 東京市牛込區白銀町貳拾番地
 右代表者
 佐久間 衡 治

